

ISBN 978-4-903875-24-8

Contribution to the Studies of Eurasian Languages (CSEL) Series 21

ユーラシア諸言語の動態 III ー言語の多様性と類型と混成言語ー

ユーラシア言語研究コンソーシアム 2019 年 12 月発行

Dynamics in Eurasian Languages III: —Diversity, Typology and Mixed language—

Kobe City College of Nursing / Consortium for the Studies of Eurasian Languages

(December 31, 2019), pp. 177-213.

スペイン領バスク自治州の4自治体における高校生のバスク語の使用状況
ー社会的側面と文法的側面からー

How and where do high school students use Basque? — a case of the students in
Gipuzkoa, Basque Autonomous Community —

吉田 浩美

YOSHIDA, Hiromi

(神戸市外国語大学 Kobe City University of Foreign Studies)

スペイン領バスク自治州の4自治体における高校生のバスク語の使用状況 —社会的側面と文法的側面から—ⁱ

吉田 浩美

キーワード：現代バスク語，バスク語母語話者，バスク語新話者，高校生

1. 調査の動機と目的

スペイン領バスク地方（現在のバスク自治州とナファロア自治州；3章の地図I参照）では、1975年のフランコ政権の終焉とともにバスク語の公的使用が解禁されるとⁱⁱ、「バスク語で教育活動を行う学校」（イカシトラ ikastola と呼ばれる）が次々と開校され、子供たちにバスク語で教育を授けることができるようになった。それからおよそ半世紀の間、イカシトラで学ぶ生徒の数は右肩上がりに増え続け、その成果として、バスク語ができる人の数が増加した。Eustat (Euskal Estatistika Erakundea / Basque Statistics Office；バスク自治州政府の機関)によると、スペイン領バスク自治州では次のような数字が報告されているⁱⁱⁱ：

	1981年	2001年	2016年
総人口	2,141,353人	2,079,210人	2,171,886人
バスク語ができる人 (%)	21.53%	32.3%	42.20%

人口がそれほど変わっていないなか、バスク語ができる人の割合は、2016年には1981年の倍近くまで増えている。親がバスク語の話し手でなくても、子供を幼少時からイカシトラへやる、というパターンが増加したことが大きな要因であると言える。

このように「バスク語ができる人の数」においては一定の成果が上がったが、それに伴い、昨今聞かれるのが「イカシトラへ行っているのにバスク語のレベルが低い」「バスク語を使うのは教室内だけで、一歩外に出るとたちまちスペイン語^{iv}にスイッチする」といった、教育の現場や識者からの声である。その実情を少しでも知りたいと思ったのがこの調査を行った動機であり、高校生のバスク語使用状況とバスク語能力の相関関係を調べるのが調査の目的である。

2. 調査方法

スペイン領バスク自治州ギプスコア県の4つの自治体にある、バスク語で教育活動を行っている4つの高校の1年生と2年生に対してアンケートによる質問調査を行った。

アンケートに協力してくださった学校の教職員の皆様と生徒諸君に、あらためて感謝申し上げます。

質問項目は、基本情報およびバスク語の使用状況に関するもの、バスク語の基本的な表現に関するものに大別される：

- 基本情報および使用状況に関する質問：(1) 学年, (2) 性別, (3) 居住地, (4) 父母の出身地, (5) 父母の母語, (6) 父母のバスク語能力, (7) 父親とどの言語で話しているか, (8) 母親とどの言語で話しているか, (9) 兄弟姉妹とどの言語で話しているか, (10) 友人と学校でどの言語で話しているか, (11) 友人と街でどの言語で話しているか, (12) もっとも多くバスク語を使う相手はだれか。(12)の結果については別の稿で扱う。)
- 文法や表現に関するもの：次のことをバスク語でどのように言うか：(13) 名前の尋ね方, (14) カフェオレの頼み方, (15)「危ない、車が来るよ!」. (16)「ああ、お腹すいた!」, (17)「暗くなってきたね、(私たち)もう帰るよね?」, (18)「先日イニャキと夕食をとった」, (19)「イニャキはアネは今日来ないだろうと言っている」, (20)「イニャキは学校へ行かなければならない、そして、一方君は家にいなければならぬ」, (21)「君はだれが来ると思う?」, (22)「私はアネが明日何時に来るかわからない」, (23)「雨が降っている」, (24)「カルメンは要求の多い女子だ」, (25)「あの女の子とあの男の子は私たちの娘と息子だ」. (17) 以下はスペイン語で提示した文をバスク語に直してもらう形式。いずれも自由記述による回答で、複数回答も可とした。各質問の目的は後述する。

なお、こうしたアンケート調査には、次のような欠点が考えられる：大勢にいっせいに答を筆記してもらう形式であることから、勘違いやケアレスミスがあった場合、一対一の面接調査と異なり、それらをその場で確認したり修正したりすることができない、意識的にせよ無意識的にせよ、常に本当のことを書くとは限らない、隣席の人の答を写すことがあるかもしれない、など。また、調査者の不手際のために回答者が回答に迷ったりする場面があった。しかし、そういったことを勘案しても、一定の意味ある結果は得られるものと考えられる。

3. 調査対象校の情報

スペイン領バスク自治州の教育システム⁴⁾は概略次のとおり：

表1 《スペイン領バスク自治州の教育システム》


義務教育	Lehen Hezkuntza (初等教育)：日本の小学校に相当。6年制。	
	Derrigorrezko Bigarren Hezkuntza (第2義務教育)：日本の中学校に相当。4年制。	
義務ではない	Batxilerra (中等教育)：日本の高等学校に相当。2年制。	中級職業学校 (日本の工業高校、商業高校などに相当。2年制)
	大学：4年または6年制。	高等職業学校 (2年制)

調査を実施した4校の基本情報は以下のとおり：

表Ⅱ 《調査対象校の基本情報》(数値は、%でないものは全て人数.)

学校名		X校	Y校	P校	Q校
公私の別		公立(バスク自治州立)			
所在地		スペイン領バスク自治州ギブスコア(Gipuzkoa)県			
県	自治体	アスコイティア (Azkoitia)	アスペイティア (Azpeitia)	ドノステティア - サ ン・セバステリアン (Donostia - San Sebastián)	レガスピ (Legazpi)
コース		理系, 文系	理系, 文系	理系, 技術系, 文系, 芸術系	技術系
教育言語		バスク語	バスク語	バスク語 または スペイン語*	バスク語
学生数		1年生: 88	1年生: 62	バスク語コース1年生: 224 スペイン語コース1年生: 132	1年生: 20
		2年生: 63	2年生: 75	バスク語コース2年生: 182 スペイン語コース2年生: 134	2年生: 17
回答者数: 総計 550		・1年生: 85 (女 50/男 35) ・2年生: 59 (女 37/男 22) 計: 144	・1年生: 59 (女 33/男 26) ・2年生: 71 (女 34/男 37) 計: 130	・1年生: 125 (女 72/男 52/不明 1) ・2年生: 116 (女 69/男 47) 計: 241	・1年生 20 (女 13/男 7) ・2年生: 15 (女 7/男 8) 計: 35
所在地 の 情 報 vi	人口(2018)	11,964人	14,916人	180,989人	8,428人
	スペイン 外出身者 (2018)	9.57%	7.98%	10.61%	4.74%
	バスク語 話者 (2016)	76.91%	83.69%	46.01%	60.77%
※この学校にはバスク語で教育活動を行うコースとスペイン語で教育活動を行うコースが設置されており, 生徒はどちらかを選択する.					

地図Ⅰ 《バスク地方7領域(歴史的, 伝統的, 文化的)と調査校所在地の位置》

	フランス領	1 ラプルディ 2 低ナファロア 3 スベロア	◆ヌーヴェル=アキ テーヌ地域圏、ピレ ネー=アトランティ ック県の一部
	スペイン領	4 ビスカイア 5 ギブスコア 6 アラバ 7 ナファロア	◆この3領域で「バ スク自治州」を形 成。 ◆「ナファロア自治 州」を形成。
	◆1～7の7領域が, 歴史的・統的・文化的文脈で 「バスク地方」と呼ばれている領域。		

4. 調査対象者のバスク語の使用状況（社会的な側面）

4.1 生徒の居住地

X校とY校とQ校については、学校の所在地に住んでいる生徒が大多数である。

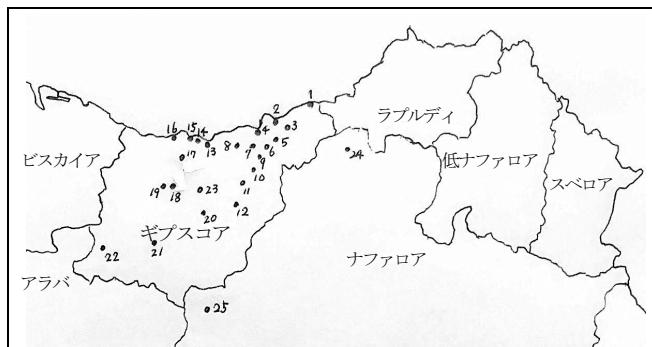
X校：144人中、学校所在地であるアスコイティアに141人、同じギプスコア県内の他の自治体に1人（アレチャバレタ Aretxabaleta）、無回答1人。

Y校：130人中、学校の所在地であるアスペイティアに94人、X校の所在地であるアスコイティアに1人、近隣の高校課程のない自治体から通っている生徒が36人（ベイサマ Beizama, 2人, エレシル Errezil, 5人, セストア Zestoa, 28人）。

Q校：学校所在地のレガスピに34人、無回答1人。

P校については、学校の所在地に居住する生徒が多数ではあるが（それでも65.2%と半分を超える程度である）、近隣の高校のない自治体から一定の人数の生徒が通っているほか、希少な芸術コースを志望する生徒が、遠方の様々な自治体からも通っている。隣のナファロア自治州に居住している生徒も2人見られる。地図IIを参照されたい。

地図II 《4校の生徒の居住地》（★はP校の生徒の居住地と人数）



- 1 オンダリビア★
(Hondarribia) 2人
- 2 パサイア★ (Pasaia) 6人
- 3 エレンテリア★
(Errenteria) 30人
- 4 ドノスティア -
サン・セバスティアン★
(Donostia-San Sebastián),
P校所在地. 157人.

- 5 アスティガラガ★ (Aztigarraga) 20人
- 6 エルナニ★ (Hernani) 1人.
- 7 ラサルテ・オリア★ (Lasarte-Oria) 2人
- 8 ウスルビル★ (Usurbil) 3人
- 9 ウルニエタ★ (Urnietta) 2人.
- 10 アンドアイン★ (Andoain) 2人.
- 11 ビリャボナ★ (Villabona) 2人.
- 12 トロサ★ (Tolosa) 2人.
- 13 オリオ★ (Orio) 3人.
- 14 サラウツ★ (Zarautz) 2人.
- 15 ゲタリア★ (Getaria) 1人.
- 16 スマイア★ (Zumaia) 1人.
- 17 セストア (Zestoa)
- 18 アスペイティア (Azpeitia), Y校所在地.
- 19 アスコイティア (Azkoitia), X校所在地.
- 20 ベイサマ (Beizama)
- 21 レガスピ (Legazpi), Q校所在地.
- 22 アレチャバレタ (Aretxabaleta)
- 23 エレシル (Errezil)
- 24 ベラ★ (Bera) 1人.
- 25 アルチャス★ (Altsasu) 1人.

4.2 父母の出身地

次に、父母の出身地に関する調査結果を掲げる。4校すべてにおいて、父母ともに学

校所在地のあるギプスコア県内の出身者が多数を占めている。また、バスク地方外の出身者の比率は、Q校がやや高いものの、他の3校はほぼ同じくらいの数値である。P校の所在地は県の中心都市であるが、そのためにこの比率が特に高いわけではないということが興味深い。

表 III 《父親の出身地》(%以外の数字は人数。以下のすべての表において同様。学校名の後の数字は回答数。)

			X校 (140)	Y校 (130)	P校 (241)	Q校 (35)
伝統的バスク地方	スペイン領バスク自治州	ギプスコア県 [うち学校所在地]	125 (89.3%) [88 (62.9%)]	114 (87.7%) [52 (40%)]	203 (84.3%) [112(46.5%)]	24 (68.6%) [16(66.7%)]
		ビスカイア県	5	5	3	4
		アラバ県	0	0	1	0
	スペイン領ナファロア自治州	0	0	4	0	
	計		130 (92.9%)	119 (91.5%)	211 (87.6%)	28 (80%)
バスク地方以外	スペインの他の地域		3	4	17	4
	ヨーロッパ		3	2	6	0
	中南米		0	2	3	2
	アフリカ		1	1	2	1
	アジア		3	2	2	0
	計		10 (7.1%)	11 (8.5%)	30 (12.4%)	7 (20%)

表 IV 《母親の出身地》

			X校 (144)	Y校 (130)	P校 (236)	Q校 (35)
伝統的バスク地方	スペイン領バスク自治州	ギプスコア県 [うち学校所在地]	130 (90.3%) [63 (43.8%)]	118 (90.8%) [77 (59.2%)]	199 (84.3%) [106(44.9%)]	22 (62.9%) [17(48.6%)]
		ビスカイア県	3	2	4	1
		アラバ県	0	0	2	1
	同ナファロア自治州	1	0	6	1	
計		134 (93.1%)	120 (92.3%)	211 (89.4%)	25 (71.4%)	
バスク地方以外	スペインの他の地域		3	2	12	7
	ヨーロッパ		2	3	1	0
	中南米		2	2	8	2
	アフリカ		1	1	2	1
	アジア		2	2	1	0
	kanpotarra 「よその人」との回答		0	0	1	0
	計		10 (6.9%)	10 (7.7%)	25 (10.6%)	10 (28.6%)

4.3 父母の母語

父母の母語については以下のとおりである：

表V 《父母の母語》

	X校 (144)		Y校 (130)		P校 (241)		Q校 (35)	
	母親	父親	母親	父親	母親	父親	母親	父親
バスク語	101	107	106	103	69	73	11	7
スペイン語	35	30	17	19	157	151	21	26
バスク語とスペイン語				2	9	5	2	1
フランス語					1	1		
ポルトガル語	2	1	1	1		1		
イタリア語						1		
英語		1			1	3		
ドイツ語						1		
ボスニア語	1	1						
ルーマニア語						1		
ルーマニア語とハンガリー語			1	1				
パンジャブ語	1	1						
ウルドゥー語	1	1	1	1				
ウルドゥー語とパンジャブ語	1	1						
アラビア語	1	1	1	1			1	1
中国語			1	1	1	1		
その他			1 ^(a)		3 ^(b)	1 ^(c)		
不明	1		1	1		2		
計	144	144	130	130	241	241	35	35

注： (a)：スペイン語とドイツ語の2言語
(b)：トウィ(Twi)語（ガーナ）と英語の2言語=1人，カタルーニャ語とスペイン語の2言語=1人，スペイン語とフランス語の2言語=1人
(c)：ガリシア語とスペイン語の2言語

母語がバスク語と他言語の2言語であるとされるケースもバスク語母語話者の中に計上して，父母がバスク語母語話者かそうでないかの人数と割合は次のとおり。

表VI

	X校 (144)		Y校 (130)		P校 (241)		Q校 (35)	
	母親	父親	母親	父親	母親	父親	母親	父親
バスク語母語話者	101 (70.6%)	107 (74.3%)	106 (82.2%)	105 (81.4%)	78 (32.4%)	78 (32.6%)	13 (37.1%)	8 (22.9%)
非バスク語母語話者	42 (29.4%)	37 (25.7%)	23 (17.8%)	24 (18.6%)	163 (67.6%)	161 (67.4%)	22 (62.9%)	27 (77.1%)
不明	1	0	1	1	0	2	0	0

X校とY校では，所在地のバスク語率が高く，また父母の多くが学校所在地の出身者であることから，父母がバスク語母語話者である率がそれぞれ7割，8割を超えている。それに対し，所在地のバスク語率が低く，またバスク語率の低いところ出身の父母が多

いP校とQ校では、他言語（事実上スペイン語が大半を占めるが）を母語とする父母の割合が高くなっている。

父母の母語の組み合わせは以下のとおり。

（以下のすべての表において、Bは「バスク語」、Fは「バスク語以外の言語」、B & Fは「バスク語とバスク語以外の言語の2言語」を表す。「～/～」は、「父母のどちらか一方が～、もう一方が～」を表す。例えば「B/B」は父母ともにバスク語母語話者であることを表す。また、「一方のみ」は「父母の一方のみについて回答している」を表す。

表 VII 《父母の母語の組み合わせ》

	X校 (144)	Y校 (130)	P校 (241 ^(a))	Q校 (35)
B/B	90 (62.5%)	95 (73.1%)	32 (13.3%)	4 (11.4%)
B/F	29 ^(b) (20.1%)	17 (13.1%)	72 (30%)	10 (28.6%)
F/F	25 (17.4%)	15 (11.5%)	123 (51.3%)	20 (57.2%)
B & F/B & F	0	0	2 (0.8%)	1 (2.9%)
B & F/B	0	1 (0.8%)	4 (1.7%)	0
B & F/F	0	1 (0.8%)	5 (2.1%)	0
一方のみ : B	0	1 (0.8%)	1 (0.4%)	0
一方のみ : F	0	0	1 (0.4%)	0
無回答	0	0	1	0

注： (a)回答者は241人だが、割合は無回答1人を除いた240を分母とする。
(b)「一方の母語不明」1人含む。

4.4 父母のバスク語能力

次に、父母がバスク語母語話者であるか、バスク語新話者（他言語の母語話者で、成人後あるいは成人に近くなってから外国語としてバスク語を習得した人を「バスク語新話者」と呼ぶこととするⁱⁱⁱ。以下、単に「新話者」と記すこともある）であるか、非バスク語話者であるか、についての結果を掲げる：

表 VIII 《父母のバスク語能力》

	X校 (144)		Y校 (130)		P校 (241)		Q校 (35)	
	母親	父親	母親	父親	母親	父親	母親	父親
バスク語母語話者	101 (70.1%)	107 (74.3%)	106 (81.5%)	105 (80.8%)	78 (32.4%)	78 (32.4%)	13 (37.1%)	8 (22.9%)
バスク語新話者	20 (13.9%)	14 (9.7%)	13 (10%)	10 (7.7%)	101 (41.9%)	59 (24.5%)	12 (34.3%)	3 (8.6%)
非バスク語話者	19 (13.2%)	22 (15.3%)	10 (7.7%)	14 (10.8%)	61 (25.3%)	101 (41.9%)	8 (22.9%)	22 (62.9%)
母語話者か新話者か不明	0	0	1 (0.8%)	0	0	0	0	0
バスク語能力不明	4 (2.8%)	1 (0.7%)	0	1 (0.8%)	1 (0.4%)	3 (1.2%)	2 (5.7%)	2 (5.7%)

バスク語母語話者に関しては父母の母語の調査結果と同様である。P校とQ校では、母語話者が少ないのに伴い、新話者の割合がX校とY校に比べて高い。

バスク語母語話者であれ、新話者であれ、とにかくバスク語ができる、という父母の人数と割合を示したものが次の表である：

表IX 《母語か非母語かを問わず、バスク語話者である両親の人数と割合》

	X (288人中)	Y (260人中)	P (482人中)	Q (70人中)
バスク語母語話者	208 (72.2%)	211 (81.2%)	156 (32.4%)	21 (30%)
バスク語新話者	34 (11.8%)	23 (8.8%)	160 (33.2%)	15 (21.4%)
母語話者か新話者か不明	0	1 (0.4%)	0	0
計	242 (84%)	235 (90.4%)	316 (65.6%)	36 (51.4%)

また、父母のバスク語能力の組み合わせは以下のとおりである（以下の表中、「バスク語母語話者」を単に「母語話者」、「バスク語新話者」を単に「新話者」、「非バスク語話者」を「他言語話者」と表記する）：

表X 《父母のバスク語能力の組み合わせ》

	X校 (144)	Y校 (130)	P校 (241)	Q校 (35)
父母とも母語話者 ^(a)	90 (62.5%)	96 (73.8%)	38 (15.8%)	5 (14.3%)
母語話者と新話者	18 (12.5%)	12 (9.2%)	53 (22%)	6 (17.1%)
父母とも新話者	3 (2.1%)	3 (2.3%)	27 (7.1%)	0
母語話者と他言語話者	8 (5.6%)	5 (3.8%)	27 (7.1%)	5 (14.3%)
新話者と他言語話者	9 (6.3%)	5 (3.8%)	52 (21.6%)	10 (28.6%)
父母とも他言語話者	12 (8.3%)	7 (5.4%)	42 (17.4%)	7 (20%)
母語話者と不明 ^(b)	3 (2.1%)	1 (0.8%)	0	0
父母とも不明 ^(c)	1 (0.7%)	0	0	2 (5.7%)
片方のみ：母語話者	0	1 (0.8%)	1 (0.4%)	0
片方のみ：新話者	0	0	1 (0.4%)	0

注： (a)バスク語と他言語の二つが母語、と答えた分もここに含める。
 (b)一方が母語話者か新話者か不明。
 (c)父母ともにバスク語ができるかどうか不明。

4.5 父母との意思疎通に使う言語と父母のバスク語能力の関係

4.5.1 父母とどの言語で意思疎通しているか

次に、父母と普段どの言語で意思疎通しているか、および、父母のバスク語能力と、普段の意思疎通言語との関係について見ていく。

まずは、父母と普段どの言語で意思疎通しているか、という質問に対する回答の結果である。表中、Bは「バスク語」、Fは「他言語」、B&Fは「バスク語と他言語を併用」、

～/～は「父母の一方とは～，もう一方とは～」を表す．以下のすべての表で同様：

表 XI 《父母とどの言語で意思疎通しているか》

意思疎通言語↓	X 校 (144)	Y 校 (130)	P 校 (241)	Q 校 (35)
B/B	89 (61.8%)	99 ^(a) (95+4) (76.2%)	39 ^(b) (37+2) (%)	5 (14.8%)
B/F	16 (11.1%)	7 (5.4%)	34 (14.1%)	5 (14.8%)
F/F	23 ^(c) (22+1) (16%)	16 (12.3%)	110 (107+3) (45.7%)	18 (51.4%)
B & F/B & F	6 (4.2%)	3 (2.3%)	19 (7.9%)	1 (2.9%)
B/B & F	3 (2.1%)	3 (2.3%)	11 (4.6%)	0
F/B & F	7 (4.9%)	2 (1.5%)	28 (11.6%)	6 (17.1%)

注： (a) 現時点で父母の一方とのみコミュニケーションをとっている状況にある 4 人もここに含む．家庭の中で当該言語のみが使われているという状況に変わりがないため．
 (b) 上と同じ理由による 2 人を含む．
 (c) 上と同じ理由による 1 人を含む．

両親の多くがバスク語母語話者である X 校と Y 校では「両親とバスク語」が多数を占めるが，両親の母語話者率の低い P 校と Q 校では「両親と他言語」が半数を占めている．

4.5.2 バスク語話者である父母とどの言語で意思疎通しているか

父母とバスク語で意思疎通するためには，父母が，母語話者であれ新話者であれ，バスク語話者であることが大前提となる．そこで，「父母ともにバスク語母語話者である生徒」，「父母の一方がバスク語母語話者で，一方がバスク語新話者である生徒」，「父母ともにバスク語新話者である生徒」が親とどの言語で意思疎通するかについて調べた．意思疎通言語については「父母とバスク語 (B/B)」，「一方とバスク語，一方と他言語 (B/F)」，「父母と他言語 (F/F)」，「父母と 2 言語併用 (B & F/B & F)」，「一方とはバスク語，一方とはバスク語と他言語を併用 (B/B & F)」，「一方とは他言語，一方とはバスク語と他言語を併用 (F/B & F)」の 6 パターンが考えられる．

表 XII は「父母ともにバスク語母語話者である生徒が親との意思疎通にどの言語を用いるかと示したものである．

表 XII 《父母ともにバスク語母語話者である生徒の場合》

意思疎通言語↓	X 校： 90 (62.5%) ^(a)	Y 校：96 (73.8%)	P 校：38 (15.8%)	Q 校：5 (14.3%)
B/B	84 (93.3%)	96 (100%)	26 (68.4%)	3 (60%)
B/F	1 (1.1%)	0	0	0
B & F/B & F	3 (3.3%)	0	7 (18.4%)	1 (20%)
B/B & F	1 (1.1%)	0	3 (7.9%)	0
F/B & F	1 (1.1%)	0	1 (2.6%)	1 (20%)
F/F	0	0	0	0

(a) 全調査対象者数に対する割合；X 校：144，Y 校：130，P 校：241，Q 校：35.

X校とY校では父母がバスク語母語話者であれば、9～10割がバスク語で意思疎通を行っている。P校とQ校では6割台にとどまるものの、他のパターンよりもはるかに高率ではある。

表 XIII は「父母の一方がバスク語母語話者で一方がバスク語新話者である生徒の場合」である：

表 XIII 《父母の一方がバスク語母語話者で一方がバスク語新話者である生徒の場合》

意思疎通言語↓	X校:18(12.5%)	Y校:12(9.2%)	P校:55(22.8%)	Q校:6(17.1%)
B/B	5(27.8%)	2(16.7%)	9(16.4%)	2(33.3%)
B/F	6(33.3%)	4(33.3%)	20(36.4%)	3(50%)
B&F/B&F	3(16.7%)	1(8.3%)	6(10.9%)	0
B/B&F	2(11.1%)	3(25%)	9(16.4%)	0
F/B&F	2(11.1%)	0	7(12.7%)	1(16.7%)
F/F	0	2(16.7%)	4(7.3%)	0

4校すべてで「B/F」がもっとも多くなっているが、いずれのケースでも、バスク語はもっぱら母語話者である親に対して使われ、新話者の親には他言語で対応している。「B/B&F」の場合も、バスク語は母語話者で親に対して、B&Fは新話者に対してである。「F/B&F」では、母語話者に対してはB&F、新話者に対してはFが使用されている。なお、「父母と他言語(F/F)」がY校に2人、P校に4人いるが、その理由は個別にあると考えられるが、今回は理由は尋ねていない。

表 XIV は「父母ともにバスク語新話者である生徒の場合」である。Q校にはこれに該当する生徒は0人であった。他の3校では、「F/B&F」と「F/F」の割合が高くなっている。

表 XIV 《父母ともにバスク語新話者である生徒の場合》

意思疎通言語↓	X校:3(2.1%)	Y校:3(2.3%)	P校:27(7.1%)	Q校:0
B/B	0	0	3(11.1%)	0
B/F	0	0	2(7.4%)	0
B&F/B&F	0	0	4(14.8%)	0
B/B&F	0	0	0	0
F/B&F	2(66.7%)	0	6(22.2%)	0
F/F	1(33.3%)	3(100%)	13(48.1%)	0

この場合の他言語とは、事実上、父母の母語であるが、このような結果には様々な要因が考えられるだろう：新話者の場合、母語の方が楽に使えるということは想像に難しくなく、どうしてもそちらに傾いてしまう（子供もその言語ができるので、子供の方が親に合わせる）、あるいは子供がその言語でより流暢に意思疎通ができるようになることを願って当該の言語を積極的に使う、ということも考えられる。

いずれにせよ、父母がバスク語新話者の場合、母語話者の場合に比べて他言語あるい

は2言語併用になりやすい、ということが言えるようだ。

4.6 兄弟姉妹とどの言語で意思疎通しているか

兄弟姉妹もバスク語で教育活動を行う学校に通っている可能性が高く、したがってバスク語ができる可能性が高いわけだが、結果は次のとおり：

表 XV 《兄弟姉妹とどの言語で意思疎通しているか》

兄弟姉妹がいる生徒の数→	X校 (129)	Y校 (122)	P校 (209)	Q校 (30)
バスク語	104 (80.6%)	108 (88.5%)	52 (24.9%)	5 (16.7%)
バスク語と他言語	12 (9.3%)	5 (4.1%)	61 (29.2%)	12 (40%)
他言語	13 (10.1%)	9 (7.4%)	96 (45.9%)	13 (43.3%)

X校とY校では「バスク語で意思疎通する」率がそれぞれ8割、ほぼ9割と高いのに対し、P校とQ校ではかなり低い。P校とQ校の特徴は、兄弟姉妹と他言語で意思疎通する生徒の父母218人中、バスク語を母語とする人は10人のみで、父母ともにバスク語母語話者という生徒は1人もいない。また、父母とは他言語で意思疎通するが、兄弟姉妹とはバスク語で、という生徒は、P校で3名、Q校で0名と少数である。このことから、父母がバスク語母語話者でないと、家庭全体では他言語に傾くとと言える。

4.7 友人とどの言語で意思疎通しているか（学校と街で）

そもそも教育活動をバスク語で行う学校なのであるから、学校では友人とも当然バスク語を使用しているであろう、という予想に反して、P校とQ校ではスペイン語でを使う、という生徒の割合が高い。「もっとも多くバスク語で意思疎通を行っている相手はだれか」という質問に対する生徒の回答を見ると、「学校の教員」と答えた生徒がP校で46人 (19.1%)、Q校で5人 (14.3%) 見られる (P校とQ校を合わせると16.7%)。

表 XVI 《友人と学校でどの言語で意思疎通しているか》

	X校 (144)	Y校 (130)	P校 (241)	Q校 (35)
バスク語	135 (93.8%)	128 (98.5%)	32 (13.3%)	10 (28.6%)
バスク語とスペイン語併用	9 (6.3%)	2 (1.5%)	120 (49.8%)	18 (51.4%)
スペイン語	0	0	78 (32.4%)	7 (20%)

街には同じ学校の友人だけでなく、他校の友人もいるわけだが、その中にはバスク語の教育を受けていない人もいる。このことから、街では学校においてよりもスペイン語を使用する生徒の割合が増えることは予想されていた。X校でもわずかに増加している。

表 XVII 《友人と街でどの言語で意思疎通しているか》

	X校 (144)	Y校 (130)	P校 (241)	Q校 (35)
バスク語	129 (89.6%)	119 (91.5%)	17 (7.1%)	6 (17.2%)
バスク語とスペイン語併用	12 (8.3%)	11 (36.7%)	89 (36.9%)	17 (48.6%)
スペイン語	3 (2.1%)	0	135 (56%)	12 (34.3%)

X校とY校で「(学校だけでなく) 街でもバスク語である」とする率が高いが、その要因は、Y校の所在地にある他の2つの高校、およびX校とY校の所在地にある複数の小学校と中学校もバスク語を教育言語とする学校であるため、地元の友人は皆バスク語話者であるということ、そして、何と言っても学校の所在地自体でバスク語使用率が高いということが大きなファクターであると考えられる。

5. 調査対象者のバスク語の習得状況 (文法的な側面)

5.1 各項目ごとの結果

次に、文法的な側面に関わる問題を見ていく。おもな目的は、スペイン語の影響をどの程度受けているかを調査し、その結果と、ふだんの生活でのバスク語使用状況との相関関係を調べることである。調査項目とその具体的な目的は次のとおり。すべて複数回答可とした。:

調査項目	調査の目的
I. 人に名前を尋ねるとき、どのように言うか。	バスク語の地域的な違いがこの世代でどのくらい出るか。
II. カフェテリアで自分のためにカフェオレを注文するときどのように言うか。	スペイン語ではカフェオレ、自動車はこの文脈では“ <i>un café con leche</i> ”, “ <i>un coche</i> ”のように不定冠詞の <i>un</i> を用いるのが普通だが、バスク語でどの程度その影響を受けているか。
III. 道を横断しようとしている人に「危ない、車が来るよ!」と知らせるときどのように言うか。	
IV. 「お腹が空いている」と大げさに言うとき、どのように言うか。	スペイン語では <i>hambre</i> 「空腹」の前に不定冠詞の <i>un(a)</i> や <i>mucha</i> 「たくさんの」を置くことができるが、その影響がどの程度現れるか。
V. 次のスペイン語の表現を、バスク語でどのように言っているか。	
(a) <i>Está anocheciendo</i> . (b) <i>Nos vamos a casa pronto, ¿no?</i> 「(a) 暗くなってきたね. (b) (私たち) もう家に帰るよね?」	(a) 「暗くなる・明るくなる」などを表す特殊な構造を持つ表現, (b) 「今すぐ行くこと」をどのように言うか。
(c) <i>El otro día cené con Iñaki</i> . 「先日、私はイニャキと夕食をとった」	「先日」をスペイン語風に言うか。
(d) <i>Iñaki dice que Ane no vendrá hoy</i> . 「イニャキは、アネは今日来ないだろうと言っている」	能格と絶対格の使い分け、助動詞または動詞単純形 ⁱⁱⁱ と格の呼応。
(e) <i>Iñaki tiene que ir a la escuela</i> . (f) <i>y, tú, por el contrario, tienes que estar en casa</i> . 「(e) イ	動詞 <i>behar</i> 「～しなければならない」を含む文における格と助動詞の呼応。

ニヤキは学校へ行かなければならない, (f) そして, 一方, 君は家にいなければなら ない」	
(g) <i>¿Quién crees que vendrá?</i> 「君はだれが来 ると思う?」	間接疑問文における名詞節を作る語 尾の使い方.
(h) <i>No sé a qué hora vendrá Ane mañana.</i> 「私 はアネが明日何時に来るか知らない」	
(i) <i>Está lloviendo.</i> 「雨が降っている」	天候の表現をどのように言うか.
(j) <i>Carmen es una chica de muchas exigencias.</i> 「カルメンは要求の多い女子だ」	「多い」を複数形で言うかどうか.
(k) <i>Aquella chica y aquel chico son nuestros hijos.</i> 「あの女子とあの男子は私たちの娘 と息子だ」	「娘と息子」をスペイン語風に「息子」 を表す語で代表させて言うか.

I. 人に名前を尋ねるとき, どのように言うか.

バスク語で名前を訪ねる表現はいくつかあるが, これに関しては地域差が著しく表れたと言える. 以下のすべての表中, 学校名のあとのカッコ内の数字は「総有効回答人数」. %意外の数字は人数を表す.

(I-1) *Nola dei-tzen zara*^{ix}
how call-IMPERF AUX:you are

X (153) : 7 (13.2%)	Y (119) : 0	P (239) : 92 (38.5%)	Q (30) : 17 (56.7%)
---------------------	-------------	----------------------	---------------------

この表現は, はスペイン語の *¿Cómo te llamas?* (*cómo* : how, *te* : you (DAT or ACC), *llamas* : you call) の写しに見えるが, 使われ始めた歴史は古く, 現在では広域に渡り聞かれる表現である. したがって現代の高校生がただちにスペイン語の写しとして使っていると断言はできない. P校とQ校では多数を占め, X校とY校では少数派であることが目を引く.

次に, (I-2) ~ (I-5) は, 名前の所有者が能格で表される構造のもの. (I-2) は, 外国語話者向けのバスク語の入門書でもよく取り上げられるスタンダードな表現. P校でもっとも多い:

(I-2) *Nola duzu izen-a*
how you have it name-ABS.SG

X (153) : 16 (10.5%)	Y (119) : 5 (4.2%)	P (239) : 53 (22.2%)	Q (30) : 5 (16.7%)
----------------------	--------------------	----------------------	--------------------

(I-3)はY校でもっとも多い.

(I-3) *Nola izen-a duzu*
how name-ABS.SG you have it

X (153) : 1 (0.7%)	Y (119) : 82 (68.9%)	P (239) : 24 (10%)	Q (30) : 0
--------------------	----------------------	--------------------	------------

Y校とX校のそれぞれの所在地は隣接しているが、これほど数値が異なっている。
(I-4) と (I-5) は動詞 *eduki* 「持つ」 を使うもので、X校では (I-4) がもっとも多い:

(I-4) *Ze izen daukazu*
what name you have it

X (153) : 72 (47.1%)	Y (119) : 4 (3.4%)	P (239) : 0	Q (30) : 0
----------------------	--------------------	-------------	------------

(I-5) *Nola daukazu izne-a*
how you have it name-ABS.SG

X (153) : 5 (3.3%)	Y (119) : 13 (10.9%)	P (239) : 0	Q (30) : 0
--------------------	----------------------	-------------	------------

(I-6), (I-7) は、名前の所有者が属格で示される構造によるもの:

(I-6) *Zein da zure izen-a*
which it is your name-ABS.SG

X (153) : 39 (25.5%)	Y (119) : 9 (7.6%)	P (239) : 40 (16.7%)	Q (30) : 6 (20%)
----------------------	--------------------	----------------------	------------------

(I-7) *Nola da zure izen-a*
how it is your name-ABS.SG

X (153) : 8 (5.2%)	Y (119) : 4 (3.4%)	P (239) : 14 (5.9%)	Q (30) : 1 (3.3%)
--------------------	--------------------	---------------------	-------------------

X校とY校の所在地では地元の方が根強く保持されており、その方言差がここにも表れたと言える。それに対しP校では40%以上を占める項目がなく、ばらつきが多いのが特徴だが、これは父母の出身地が多岐に渡ること、また、そもそも父母にバスク語母語話者が少ないので、非バスク語話者の子のバスク語は共通バスク語であることから、これといった方言差が現れにくいものと考えられる。

ほかに、「名前を尋ねるときは常にスペイン語で言っている」と答えた生徒が、P校で2人、Y校で1人。P校の2人のうち1人は両親ともにバスク語新話者、1人は父母の一方が新話者、一方が非バスク語話者で、使用状況に関する調査での5つの場面、「父親との意思疎通」「母親との意思疎通」「兄弟姉妹との意思疎通」「友人との学校における意思疎通」「友人との街での意思疎通」のすべてにおいて他言語を使っている、と答えている(以下、この5つの場面をまとめて「日常生活」と記す)。Y校の1人は両親ともにスペイン国外からの移民で、非バスク語話者であり、生徒本人もバスク語を用いるのは学校のみ、と答えている。

II. カフェテリアで自分のためにカフェオレを注文するときどのように言うか.

スペイン語では“*Un café con leche*”のように、不定冠詞 *un* を用いるのが普通である。バスク語では、*kafesne* 「カフェオレ」の絶対格単数形 *kafesnea* を用いることもあれば、

数詞 *bat* 「1」を使って、*kafesne bat* とすることもある。ちなみに、バスク語学習者^xであるスペイン語の母語話者には、スペイン語の数詞 *un/uno/una* 「1」=スペイン語の不定冠詞=バスク語の *bat*、と結びつけ、多用する傾向が見られる。

(II-1) は *bat* 「1」を用いた例。 *mesedez* の代わりに *faborez* を用いたものや、 *emango didazu* 「(あなたは私にそれを) くれますか」などを付したものなど、様々なバリエーションが集まった。これら *bat* を用いた例の数と割合を掲げる。：

(II-1) *Kafesne bat, mesedez*
café au lait one.ABS.INDEF please

X (146) : 121 (82.9%)	Y (118) : 103 (87.3%)	P (219) : 183 (83.6%)	Q (31) : 30 (96.8%)
-----------------------	-----------------------	-----------------------	---------------------

この例のように *bat* 「1」を用いる同工異曲の例が4校ともに多数を占めている。

(II-2) は、絶対格単数形を用いた例。この場合も様々な例が集まっている：

(II-2) *Kafesne-a, mesedez*
café au lait-ABS.SG

X (146) : 25 (17.1%)	Y (118) : 14 (11.9%)	P (219) : 30 (13.7%)	Q (31) : 0
----------------------	----------------------	----------------------	------------

ほかに、数詞 *bat* も絶対格語尾 *-a* も付されていない「誤用」がP校で1人、バスク語の *kafesne* の代わりにスペイン語の *café con leche* を用いた生徒がP校で4人（うち1人は両親ともバスク語母語話者で、日常生活ではバスク語を使っている生徒、1人は父母の一方がバスク語母話者、もう一方が新話者で前者以外とは2言語併用という生徒、2人は両親とも非バスク語話者で、日常生活も他言語^{vi}のみ、という生徒）。スペイン語で回答した生徒がQ校で1人（父母の一方が非バスク語話者、もう一方が新話者、日常生活はスペイン語）見られた。

スペイン語ならば不定冠詞が用いられるこの文脈は、次の調査項目とも関連がある。

III. 道を横断しようとしている人に「危ない、車が来るよ！」と知らせるとき、どのように言うか。

ここでも、前問と同様、スペイン語では “*Viene un coche*” (*viene* : it comes / it is coming) と、不定冠詞の *un* を用いるのが普通である。前問との違いは、カフェオレを頼む際は具体的な数字を言う必要がある場合があるため、「カフェオレ1杯」という意味で数詞 *bat* 「1」を使う可能性が高まるが、現に目前に車を見ていて「車が来るよ」と述べるような状況では、車が1台であることが自明である、という点である。

(III-1) は *bat* 「1」を用いた例。「自動車」を表す語は *kotxe* または *auto*。

(III-1) {*Kotxe/Auto*}^{xiii} *bat dator*
{car /car} one.ABS.INDEF it is coming

X (149) : 44 (29.5%)	Y (132) : 36 (27.3%)	P (244) : 142 (58.2%)	Q (35) : 22 (62.9%)
----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------

X校とY校では3割以下だが、P校とQ校では6割前後となっている。

(III-2) は *kotxe/ auto* の絶対格単数形 *kotxe-a/ auto-a* を用いた例：

(III-2) {*Kotxe-a /Auto-a*} *dator*
 {*car-ABS.SG /car-ABS.SG*}

X (149) : 105 (70.5%)	Y (132) : 96 (72.7%)	P (244) : 102 (41.8%)	Q (35) : 12 (34.3%)
-----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------

この場合、絶対格単数形を用いる生徒がどの学校でも前問より増えているが、とくにX校およびY校で顕著である。P校およびQ校では、このような状況でも数詞 *bat* を使う傾向が強いと言える。

IV. 「お腹が空いている」ことを大げさに言うとき、どのように言うか。

この項目の目的は、スペイン語の *un(a) hambre* (*un(a)* : 不定冠詞, *hambre* : hunger), *mucha hambre* (*mucha* : much) をなぞって、バスク語でも *gose* 「空腹」に *bat* 「1」や *asko* 「たくさん」を付すことがあるかどうかを調べることであった。これらはバスク語では誤用とされる。結果は、(IV-1) のように *bat* を用いた例は4校を通じて皆無。

(IV-1) **Gose bat daukat*
 hunger one.ABS.INDEF I have it

asko を用いた例も各校ともごくわずかである：

(IV-2) **Gose asko daukat*
 much

X (144) : 1 (0.7%)	Y (130) : 1 (0.8%)	P (235) : 3 (1.3%)	Q (35) : 0
--------------------	--------------------	--------------------	------------

X校の1人は、家では他言語優勢、友人とは常にバスク語を使用。

Y校の1人は、家と街では他言語、学校でのみ2言語使用。

P校の3人のうち1人は、家と街では他言語、学校でのみ2言語使用。1人は日常生活では常に他言語、1人はバスク語は学校でごくたまに使用。

ほかに、スペイン語で回答した生徒がP校とQ校で各1人。P校の1人はバスク語は街と学校でのみ少し使用、Q校の1人は常に他言語を使用、と回答。

また、P校では (IV-3)、(IV-4) のような誤用が見られた：

(IV-3) **Kriston gose daukat*
 terrible hunger I have it

ここは *gose-a* と絶対格単数形とすべきところ。この生徒は、バスク語は街と学校でのみ少しだけ使用、と回答。

(IV-4) **Behi bat jan-go naiteke*
 cow one.ABS.INDEF eat-FUT AUX.POT.ABS:1SG
 「(私は) 牛1頭食べられる」

naiteke は「絶対格 1 人称単数に呼応する助動詞 (可能法)」であるが、ここは「絶対格および能格に呼応する形」である *dezaket* を用いるべきところ。またその際、動詞 (*jan* = 食べる) は未来分詞形をとらない。この生徒は日常生活で常に他言語を使用、と回答。

V. (a) *Está anocheciendo*. 「暗くなってきたね」, (b) *Nos vamos a casa pronto, ¿no?* 「(私たち) もう家に帰るよね？」

結果は前半 (a) と後半 (b) に分けて集計。 (a) *Está anocheciendo*. 「暗くなってきたね」に関しては、P 校において非常にバラエティに富んだ回答が得られた。

(a-1) は、「今暗くなりつつある」ことを表すのに用いられるもっともスタンダードで広く使われているもの：

(a-1) *lhun-tzen ari du*
get dark-IMPERF be doing AUX.ERG:3SG+ABS:3SG

これは、能格 NP も絶対格 NP も (省略ではなく) 欠きながら、「能格と絶対格に呼応する助動詞」が使われる「例外的な」構造である。P 校の数値が低くなっている。

X (145) : 64 (44.2%)	Y (121) : 52 (43%)	P (241) : 35 (14.5%)	Q (35) : 15 (42.9%)
----------------------	--------------------	----------------------	---------------------

(a-2) は、(a-1) での *du* が *da* になっているもので、規範的ではないが、母語話者にとって「許容される」ものである：

(a-2) *lhun-tzen ari da*
get dark-IMPERF be doing AUX. ABS:3SG

X (145) : 77 (53.1%)	Y (121) : 62 (51.2%)	P (241) : 122 (50.6%)	Q (35) : 10 (28.6%)
----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------

これは、絶対格 NP を欠きながら「絶対格に呼応する助動詞」共起する構造だが、これはある種の非人称表現 (対象がそもそもなく、動作主も表示されない) ^{xiii} に規則的に見られるものである。「暗くなる」という、動作主も対象もない事態を表すのにこの構造を用い (たくなっ) ても不思議ではない。この構造の使用者が 4 校を通じてもっとも多いことを見ると、若い世代では地域差を超えて「より例外的でない」方向へシフトしているものとも考え得る。

このようにいずれの学校でも、もっとも一般的・規範的な (a-1) と、許容範囲内と見做される (a-2) が多数を占めている。その合計は以下のとおり：

X (145) : 141 (97.3%)	Y (121) : 114 (94.2%)	P (241) : 157 (65.1%)	Q (35) : 25 (71.5%)
-----------------------	-----------------------	-----------------------	---------------------

ほかに、*gau* 「夜」を用いた次のような表現が散見された：

(a-3) *Gau-a dator*
night-ABS.SG is coming 「夜が来つつある」

(a-4) *Gau-a da*
night-ABS.SG it is 「夜だ」

(a-5) *Gau-a iris-ten ari da*
 night-ABS.SG arrive-IMPERF be doing AUX.ABS:3SG 「夜が来つつある」

iristen の代わりに *etor-tzen* (come-IMPERF), *egi-ten* (make-IMPERF), *hurbil-tzen* (approach-IMPERF) を使用した例も見られる。

また、「暗くなる」を表しているとは言い難いが、

(a-6) *Berandu da*
 late it is 「(もう) 遅いね」

など, *berandu* 「遅く, 遅い」を用いたものも少数ではあるが見られる。

明らかな誤用の例として次のようなものがあった :

- **Gaueratzen ari da* : **gaueratzen* は **gaueratu* という動詞を作り出し, その不完了分詞形としたもの. これは, *gau* 「夜」の方格形 *gau-era* に動詞を作る語尾 *-tu* を付したものと考えられるが, スペイン語の動詞 *anochece* 「夜になる, 日が暮れる」(*noche* は「夜」, *a-* を方向を表す前置詞と捉えた可能性有り) をなぞったものか.

- **Iluntzen dago* : *dago* は「3人称単数がある, ある」の意で, スペイン語の *está* (*estar* 「いる, ある」3人称単数) のなぞりか (スペイン語で進行・継続相を表す構造で *estar* が用いられることから).

- **Iluntzen dabil* : *dabil* は「3人称単数が歩いている, 活動中である」の意. これも継続中であることを表すために用いたものと思われる.

次に, (b) *Nos vamos a casa pronto, ¿no?* 「(私たち) もう家に帰るよね?」の「帰る」の部分はどう言うかに着目した. ここは *joan-go* (go-FUT) と未来分詞を用いるのが一般的かつ規範的だが, これを *joa-ten* (go-IMPERF) と不完了形にする誤用がどの程度見られるかを調べた. これはバスク語学習者や新話者に顕著な誤用とされるが, 筆者の観察では世代を問わず母語話者の中にも散見される.

(b-1) は未来分詞を用いる一般的かつ規範的な表現 (語順は文法的である限り問わない) :

(b-1) *Laster joan-go gara etxe-ra*
 soon go-FUT AUX.ABS:IPL home-ALL.SG

X (141) : 87 (61.7%)	Y (129) : 58 (45%)	P (240) : 147 (61.3%)	Q (34) : 25 (73.5%)
----------------------	--------------------	-----------------------	---------------------

(b-2) と (b-3) もよく使われるもので誤用とは言えないものである :

(b-2) *Laster etxe-ra goaz*
 soon home-ALL.SG we are going

X (141) : 20 (14.2%)	Y (129) : 15 (11.6%)	P (240) : 61 (25.4%)	Q (34) : 6 (17.6%)
----------------------	----------------------	----------------------	--------------------

(b-3) *Goazen etxera*
 let's go

X (141) : 13 (9.2%)	Y (129) : 30 (23.3%)	P (240) : 7 (2.9%)	Q (34) : 0
---------------------	----------------------	--------------------	------------

(b-4) が、件の「未来分詞の代わりに不完了分詞を用いる」という誤用であるが、今回の調査対象者においてはそれほど顕著には見られなかった：

(b-4) *Etxera joa-ten gara*
go-IMPERF

X (141) : 1 (0.7%)	Y (129) : 1 (0.8%)	P (240) : 11 (4.6%)	Q (34) : 0
--------------------	--------------------	---------------------	------------

(b-4) の文を答えた生徒 13 人の日常生活におけるバスク語の使用状況は：

2 人が他言語のみを使っている、と回答 (Y 校 1 人と P 校 1 人)。

3 人が他言語が優勢、と回答 (P 校の 3 人)。

2 人が常にバスク語と回答 (X 校 1 人と P 校 1 人)。

3 人がバスク語が優勢と回答 (P 校の 3 人)。

すなわち、他言語に傾いている生徒とバスク語に傾いている生徒がほぼ半々である。

V. (c) *El otro día cené con Iñaki*. 「先日、イニャキと夕食をとった」

この項目の目的は、「先日」を、スペイン語の *el otro día* (*el* : 定冠詞, *otro* : other, *día* : day) の写しと考えられる *beste egun-ean* (*beste* : other, *egun-ean* : day-LOC.SG) の出現率を調べることであった。この誤用も成人のバスク語学習者や新話者によく見られるものであるとされる。

バスク語で「先日」は、*lehen-go egun-ean* (*lehen-go* : before-GL), *aurre-ko egun-ean* (*aurre-ko* : before-GL), *lehen-go-an* (-an : LOC.SG), *aurre-ko-an* がもっとも一般的で広く使われている形である。これらを用いる生徒が X 校と Y 校では 9 割を超え、P 校と Q 校でも各々 7 割台、8 割台と大多数である：

(c-1) *lehen-go egunean / aurreko egunean / lehengoan / aurrekoan*

X (147) : 133 (90.5%)	Y (130) : 125 (96.2%)	P (242) : 175 (72.3%)	Q (34) : 28 (82.4%)
-----------------------	-----------------------	-----------------------	---------------------

次のような表現も散見される。これも「先日」の意である：

(c-2) {*pasa / joan*} *den* *egun-ean*
{pass.PERF / go.PERF} AUX.ABS:3SG.REL day-LOC.SG

X (147) : 2 (1.4%)	Y (130) : 0	P (242) : 8 (3.3%)	Q (34) : 1 (2.9%)
--------------------	-------------	--------------------	-------------------

スペイン語の写しである *beste egunean* は、X 校と Y 校では 0 人、P 校で 35 人、Q 校で 2 人：

(c-3) *beste egunean*

X (147) : 0	Y (130) : 0	P (242) : 26 (10.7%)	Q (34) : 2 (5.9%)
-------------	-------------	----------------------	-------------------

P校の26人のうち、4人が父母ともにバスク語母語話者、そのうち1人は日常生活では常にバスク語を使用、1人はほぼ常にバスク語を使用、2人はバスク語と他言語半々と回答。他の22人のうち、1人がバスク語優勢、7人が常に他言語使用、14人がスペイン語優勢であると答えている。Q校の2人はいずれも他言語優勢、と回答している。すなわち、P校とQ校の合計28人のうち、23人がふだんバスク語をほとんど、あるいはあまり使っていない。

また、次のような例もわずかではあるが3校に渡って見られた。これは「また別の日に」の意で、「先日」ではない：

(c-4) *beste egun bat-ean*
other day one-LOC.SG

X (147) : 2 (1.4%)	Y (130) : 0	P (242) : 2 (0.8%)	Q (34) : 2 (5.9%)
--------------------	-------------	--------------------	-------------------

また、4校を通じて、「先日」を *herenegun* 「一昨日」(11人)、*atzo* 「昨日」(7人) などが見られた。これは単なる勘違いの可能性もある。*herenegun* 「一昨日」とした生徒のうち8人は日常生活では常に他言語または他言語優勢、3人は常にバスク語、またはバスク語優勢と回答している。*atzo* 「昨日」とした生徒のうち3人は日常生活では常にまたはほぼ他言語、4人は常にバスク語であると回答しているので、バスク語使用状況との関連は定かではない。

さらに、文法的な誤用としては、*pasa den egun-ean* と位置格にすべきところを *pasa den egun-a* と絶対格にしている例が1人(P校)、**herenegun-ean* という、*herenegun* 「一昨日」に位置格語尾を付した有り得ない形の例が1人(P校)見られた。いずれも父母の一方がバスク語新話者、一方が非バスク語話者で、日常生活では他言語のみを使っていると回答している。

V. (d) *Iñaki dice que Ane no vendrá hoy.* 「イニャキは、アネは今日来ないだろうと言っている」

この項目の目的は、「イニャキ — 言う」、「アネ — 来る」の部分の動作主を表す名詞の格と助動詞との呼応を見ることである。次のように表現される：

(d-1) *Iñaki-k esa-ten du*
I-ERG say-IMPERF AUX.ERG:3SG+ABS:3SG

Ane gaur ez de-la etorri-ko
A.ABS today NEG AUX.ABS:3SG-COMP come-FUT

esaten du の代わりに *dio* (s/he is saying it), *esan du* (s/he has said it) も可。また *etorriko dela* の代わりに *datorr-ela* (s/he is coming - COMP) も可。語順は文法的である限り問わない。

「イニャキは言っている」については、大多数が文法的な文を答えている：

(d-2) *Iñaki-k esa-ten du*
I-ERG say-IMPERF AUX.ERG:3SG+ABS:3SG

X (143) : 142 (99.3%)	Y (128) : 127 (99.2%)	P (239) : 215 (90%)	Q (35) : 30 (85.7%)
-----------------------	-----------------------	---------------------	---------------------

次のように能格の語尾が落ちている例は、P校とQ校では1割弱～1.4割見られた：

(d-3) **Iñaki esa-ten du*

X (143) : 1 (0.7%)	Y (128) : 1 (0.8%)	P (239) : 23 (9.6%)	Q (35) : 5 (14.3%)
--------------------	--------------------	---------------------	--------------------

X校の1人は、両親ともスペイン外の出身者で、家では他言語、学校では2言語使用。

Y校の1人は、両親ともバスク語母語話者で日常生活ではバスク語を使用。

P校の23人とQ校の5人については、両親ともバスク語母語話者の生徒は1人もおらず、全員が日常生活では他言語のみか、ほぼ他言語を使用している。

後半の「アネは今日来ないだろう」の部分については、次の文が文法的である：

(d-4) *Ane gaur ez dela etorriko*
 A.ABS today NEG AUX.ABS:3SG-COMP come-FUT

既述のとおり *dela etorriko* の代わりにも可。X校（有効回答143）とY校（同232）とQ校（同35）では100%が文法的な文を答えている。P校では、(d-5)のように不要なところに能格のマーカ―を付し、その結果、格と助動詞が呼応していない例が241回答中9件（3.7%）見られた。

(d-5) **Ane-k ez dela etorriko*

この9人は全員が両親とも他言語母語話者であり、日常生活は常に他言語、あるいはほぼ他言語、と回答している。

V. (e) *Iñaki tiene que ir a la escuela.* 「イニャキは学校へ行かなければならない。」 (f) *y, tú, por el contrario, tienes que estar en casa.* 「そして一方君は、家にいなければならぬ。」

この項目の目的も、動作主を表す格と助動詞の呼応について調べることである。

「イニャキは学校へ行かなければならない」は、(e-1)も(e-2)も可能である。

(e-1) *Iñaki-k eskola-ra joan behar du*
 I-ERG school-ALL.SG go must.PERF AUX.ERG:3SG+ABS:3SG

(e-2) *Iñaki eskola-ra joan behar da*
 I.ABS AUX.ABS:3SG

behar 「～ねばならない」の用法には2とおおりあり、一つは(e-1)のように、どのような動詞と共に起する場合でも、動作主は常に能格で表され、助動詞もそれに呼応する形を用いるものである。もう一つは(e-2)のように、共に起する動詞が対象をとるものであるか否かにより、動作主は能格または絶対格で表され、それぞれに呼応する助動詞が共に起する、というものである^{xiv}。(e-1)が規範的とされるが、(e-2)も母語話者の間で広く使わ

れている。各回答の人数と率は次のとおり：

(e-1) *Iñakik eskola-ra joan behar du*

X (141) : 129 (91.4%)	Y (126) : 116 (92.1%)	P (237) : 88 (37.1%)	Q (34) : 12 (35.3%)
-----------------------	-----------------------	----------------------	---------------------

(e-2) *Iñaki eskolara joan behar da*

X (141) : 3 (2.1%)	Y (126) : 5 (4%)	P (237) : 69 (29.1%)	Q (34) : 9 (26.5%)
--------------------	------------------	----------------------	--------------------

X校とY校では9割以上が(e-1)の構造を使用しているのに対し、P校とQ校では、(e-1)と(e-2)の使用率に大きな差はない。両方を合わせた数値は次のとおり：

X (141) : 132 (93.6%)	Y (126) : 121 (96%)	P (237) : 157 (66.2%)	Q (34) : 21 (61.8%)
-----------------------	---------------------	-----------------------	---------------------

これはつまりいずれの構造であれ文法的な構造を用いている回答の総計であるが、P校とQ校では6割台に留まっていることが目を引く。

次は、動作主が絶対格で現れているが、それに呼応すべき助動詞が使われていないもの(e-1の構造で、動作主を表すNPから能格のマーカールが落ちているものと見ることできる)：

(e-3) **Iñaki eskolara joan behar du*

X (141) : 9 (6.4%)	Y (126) : 3 (2.4%)	P (237) : 75 (31.6%)	Q (34) : 13 (38.2%)
--------------------	--------------------	----------------------	---------------------

P校は3割、Q校はほぼ4割にのぼる。

X校の9人のうち、1人は父母ともバスク語母語話者で、日常生活では常にバスク語、他の8人は他言語優勢と回答している。

Y校では、1人は父母とも非バスク語母語話者で、日常生活ではスペイン語優勢と回答、あとの2人はいずれも父母ともバスク語母語話者で日常生活ではバスク語を使用と回答。

P校では、14人が常に他言語を使っていると回答、4人がバスク語優勢と回答、1人がバスク語と他言語半々と回答、あとの56人は他言語優勢、と回答。なお、父母ともにバスク語母語話者であるのは3人、父母の片方のみバスク語母語話者であるのは23人。

Q校では、13人中、4人が日常生活では他言語を使っていると回答、9人が他言語優勢と回答。父母ともにバスク語母語話者である生徒が2人いる(2人とも他言語優勢)。

次は動作主が能格で表されているにも関わらず、それに呼応すべき助動詞が用いられていないもの(e-2の構造で、動作主を表すNPに不要な能格の語尾が付された、と見ることできる)。この誤用は少ない：

(e-4) **Iñaki-k eskolara joan behar da*

X (141) : 0	Y (126) : 2 (1.6%)	P (237) : 4 (1.7%)	Q (34) : 0
-------------	--------------------	--------------------	------------

ほかにP校で*Iñaki~zara* (*zara*はABS:2SGに呼応する助動詞)の誤用が1人。

次に、「一方、君は家にいなければならない」も (e) と同様、次の (f-1) も (f-2) も可能である。規範的なのはこの場合も (f-1) だが、(f-2) もバスク語母語話者の間で広く使われている。なお、有効回答者数が前問より少ないのは、「イニャキは学校へ行かなければならない」に続く文として提示しているため、後半部では助動詞を省略している回答が散見され、そのような回答を除いているためである：

(f-1) *Zu-k etxe-an geratu behar duzu*
2SG-ERG home-LOC.SG stay must.PERF AUX.ERG:2SG+ABS:3SG

X (135) : 116 (85.9%)	Y (112) : 81 (72.3%)	P (225) : 51 (22.7%)	Q (33) : 6 (18.2%)
-----------------------	----------------------	----------------------	--------------------

(f-2) *Zu etxean geratu behar zara*
2SG.ABS AUX.ABS:2SG

X (135) : 10 (7.4%)	Y (112) : 15 (13.4%)	P (225) : 116 (51.6%)	Q (33) : 14 (42.4%)
---------------------	----------------------	-----------------------	---------------------

前問と同様、X校とY校では能格を使う構造 (f-1) を使用する生徒の方が多いが、絶対格を使う構造 (f-2) を使う生徒が前問よりも増えている。P校では逆転している。なお、二つの回答の合計は次のとおり：

X (135) : 126 (93.3%)	Y (112) : 96 (85.7%)	P (225) : 167 (74.2%)	Q (33) : 20 (60.6%)
-----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------

(f-3) では動作主＝絶対格と、助動詞が呼応していない。これも (f-1) の文から能格のマーカ―が落ちたものと見ることができる：

(f-3) **zu etxean geratu behar duzu*

X (135) : 5 (3.7%)	Y (112) : 2 (1.8%)	P (225) : 16 (7.1%)	Q (33) : 4 (12.1%)
--------------------	--------------------	---------------------	--------------------

X校では、5人のうち2人は日常生活では他言語優勢、2人はバスク語と他言語半々、1人はバスク語を使っており、父母ともバスク語母語話者、と回答。

Y校は、2人とも父母ともバスク語母語話者で日常生活はバスク語を使用、と回答。

P校では、16人のうち、11人が日常生活で他言語優勢、5人がバスク語優勢と回答。また16人のうち父母ともバスク語母語話者であるのは2人、どちらかがバスク語母語話者であるのは10人。

Q校では、4人のうち、1人だけが父母の片方がバスク語母語話者でふだんの生活でバスク語優勢と回答、2人は父母ともに非バスク語母語話者でスペイン語優勢、1人は同じく常にスペイン語で生活、と回答。

(f-4) では、動作主＝能格と、助動詞が呼応していない。(f-2) の文に余分なマーカ―を付したものと見こともできる：

(f-4) **zu-k etxean geratu behar zara*

X (135) : 3 (2.2%)	Y (112) : 11 (9.8%)	P (225) : 42 (18.7%)	Q (33) : 9 (27.3%)
--------------------	---------------------	----------------------	--------------------

X校以外の3校で、(f-3)の誤用よりも割合が高くなっているのが興味深い。X校では、3人中1人は家庭では他言語、それ以外ではバスク語を使用、1人は他言語優勢、1人は父母とも母語話者だが他言語やや優勢、と回答。Y校では11人中、3人が生活のあらゆる面でバスク語のみ使用（いずれも父母ともに母語話者）、2人がバスク語優勢（いずれも父母の一方がバスク語母語話者、一方がバスク語新話者）、5人が他言語優勢、1人がバスク語と他言語半々、としている。P校では42人中、15人が日常生活で他言語のみ使用、2人がバスク語優勢（2人とも父母ともバスク語母語話者）、1人がバスク語と他言語半々（父母ともにバスク語母語話者）24人が他言語優勢、と回答。Q校では9人中、2人が日常生活で他言語のみ使用、1人がバスク語と他言語半々、あとの6人が他言語優勢、と回答している。この6人のうち、2人は父母ともにバスク語母語話者である。

V. (g) ¿Quién crees que vendrá? 「君はだれが来ると思う？」

この項目の目的は、「だれが来ると」の節の語尾 *-(e)la* の使用状況を見ることである。結果を見ると、絶対格で *nor* と表示されるべき「だれ」が *nork* と能格で表示されている例が少なからず見られた。

(g-1) は文法的かつ規範的なものである：

(g-1) *Nor* *uste* *duzu* *etorri-ko* *de-la*
 who.ABS.3SG think.PERF AUX.ERG:2SG+ABS:3SG come-FUT AUX.ABS:3SG-COMP

語順は *Nor etorriko dela uste duzu?* も可。また、*nor* の代わりに *zein*, *etorriko dela* の代わりに *datorr-ela* (*dator* : s/he is coming-COMP) も可。*uste* の代わりに *pentsa-tzen* (think-IMPERF) も可。

X (148) : 148 (100%)	Y (122) : 122 (100%)	P (229) : 196 (85.6%)	Q (33) : 28 (84.8%)
----------------------	----------------------	-----------------------	---------------------

X校とY校では誤用はゼロ、P校、Q校でも8割以上がこの回答またはこれに準ずる数値である。

以下は誤用の例。(g-2)では *dela* とすべきところが *den* となっている誤用。

(g-2) **Nor uste duzu etorriko de-n*

den の *-n* は間接疑問文の名詞節を作る語尾（例 h-1 を参照）。P校9人、Q校1人。P校では9人中2人が日常生活で他言語を使用と回答、1人がバスク語優勢（父母ともにバスク語新話者）、6人が他言語優勢。Q校の1人は常に他言語と回答（父母の一方がバスク語母語話者）。

(g-3)は、*dela* とすべきところが *denik* となっている誤用。

(g-3) **Nor uste duzu etorriko de-nik*

denik の *-nik* は, (g-4) のように主節が否定文の, 関節疑問ではない従属節の助動詞に接続する語尾である:

(g-4) *Ez dut uste Ane etorri-ko de-nik*
 NEG AUX.ERG:1SG+ABS:3SG think.PERF A.ABS come-FUT AUX.ABS:3SG-COMP
 「私はアネが来るとは思わない」

P校6人, Q校2人. P校の6人のうち, 1人は日常生活では常に他言語, 1人はほぼ他言語, 2人はバスク語と他言語半々, 2人は他言語優勢, と回答. Q校2人とも父母ともに非バスク語話者で, 他言語優勢, と回答している.

(g-5) は「だれ」が能格で示されている誤用:

(g-5) **Nork uste duzu etorriko dela*

P校14人, Q校1人. P校の14人のうち, 5人が日常生活で常に他言語使用(全員, 父母ともに非バスク語話者), 8人がほぼ他言語, 1人が他言語やや優勢, と回答している.

(g-6) では「だれ」が能格で示され, 助動詞 *da* に語尾が付加されていない.

(g-6) **Nork uste duzu etorriko da*

P校に1人. この生徒は父母ともに非バスク語話者で, 日常生活で他言語のみ使用.

(g-7) は「だれ」が能格で示され, *dela* とすべきところが *den* となっている誤用.

(g-7) **Nork uste duzu etorriko de-n*

P校3人, Q校1人. P校の3人はいずれも日常生活で他言語が優勢で2人は父母ともに非バスク語話者, 1人は父母の一方がバスク語母語話者, 一方がバスク語新話者.

V. (h) *No sé a qué hora vendrá Ane mañana.* 「私はアネが明日何時に来るか知らない」

この項目の目的は, 間接疑問文の名詞節中の助動詞に接続する語尾の使用状況を見ることだが, 絶対格で示されるべき「アネ」が能格で示されている例, また疑問詞の直後には動詞述語が置かれるという語順の鉄則から外れている例もわずかに見られた.

大多数の生徒が次のように文法的かつ規範的な回答をしている. *etorriko den* の代わりに *datorr-en* (s/he is coming-COMP) も可, 語順は文法的である限り問わない. また, *bihar* 「明日」が省かれている例が多数見られたが, この有無も問わない:

(h-1) *Ez dakit bihar zer ordu-tan etorri-ko de-n Ane*
 NEG I know it tomorrow what time-LOC.INDEF come-FUT AUX.ABS:3SG-COMP A.ABS

X (144) : 143 (99.3%)	Y (130) : 127 (97.7%)	P (241) : 217 (90%)	Q (35) : 31 (88.6%)
-----------------------	-----------------------	---------------------	---------------------

以下は誤用の例. (h-2) では名詞節中の助動詞 *da* に語尾が付加されていない:

(h-2) *Ez dakit zer ordutan etorriko *du Ane*

X(144) : 0	Y(130) : 3 (2.3%)	P(241) : 17 (7.1%)	Q(35) : 4 (11.4%)
------------	-------------------	--------------------	-------------------

Y校の3人のうち、2人は父母ともにバスク語母語話者で日常生活はバスク語、1人は父母の一方が新話者、一方が非バスク語話者で、日常生活はやや他言語優勢と回答。

P校の17人のうち、6人が日常生活は他言語（父母ともに非バスク語母語話者）、1人は日常生活でバスク語がやや優勢（父母ともにバスク語母語話者）、10人が日常生活は他言語が優勢（うち3人は父母の一方がバスク語母語話者）と回答。

Q校の4人のうち、1人は日常生活で常に他言語、3人は他言語優勢。いずれも父母ともに非バスク語母語話者。

(h-3) は、*den* とすべきところを *denik* としている誤用（*denik* については g-3 と g-4 を参照）。

(h-3) *Ez dakit zer ordutan etorriko *denik Ane*

Y校に1人見られたが、父母ともに非バスク語母語話者で、家庭では他言語、街ではバスク語とスペイン語半々、学校ではバスク語、と回答している。

(h-4) では、絶対格で示されるべき *Ane* に能格の語尾が付加されている。

(h-4) *Ez dakit zer ordutan etorriko *den Ane-k*.

これはP校に10人見られた（4.1%）。10人中4人は、生活では他言語（父母ともに非バスク語母語話者）、6人は家庭では他言語のみ、学校か街でまれにバスク語を用いる、と回答。

次の (h-5) は *behar* 「～ねばならない」があるために動作主の *Ane* は能格で表示しても絶対格で表示しても可であるが、それぞれに呼応する助動詞が求められる。この文では動作主を表す格と助動詞が呼応していない：

(h-5) *Ez dakit zer ordu-tan etorri *behar du-en Ane*
 come must.PERF AUX.ERG:3SG+ABS:3SG-COMP A.ABS

X校に1人。父母ともに非バスク語話者で、家庭ではスペイン語、学校でバスク語とスペイン語を併用と回答している。

語順の誤用として、(h-6) と (h-7) がP校に各々1人見られた。二つの違いは *bihar* 「明日」の有無のみで、「疑問詞の直後には動詞述語が置かれる」という鉄則から外れている点で同様である：

(h-6) *Ez dakit zer ordu-tan Ane bihar etorri-ko de-n.
 what hour-LOC.INDEF Ane tomorrow come-FUT AUX.ABS:3SG-COMP

(h-7) *Ez dakit zer ordutan Ane etorriko de-n.

このように回答した2人のうち1人は父がバスク語母語話者、母が新話者だが生活は父とは2言語、それ以外は他言語と回答、1人は父が新話者、母が非バスク語話者で日常生活はほとんど他言語と回答。

V. (i) Está lloviendo. 「雨が降っている」

この項目の目的は、天候を表す特殊な構文の使用状況を見るためである。

もっとも一般的で規範的な表現は次のものである。文中に絶対格 NP のみが存在するが、「能格+絶対格」に呼応する助動詞が現れるこの構造は、地域変種を超えて天候・気象現象を表す表現にとくによく見られるものである。

(i-1) Euri-a ari du
 rain-ABS.SG be doing.PERF AUX.ERG:3SG+ABS: 3SG

X (145) : 132 (91%)	Y (123) : 112 (91.1%)	P (242) : 138 (57%)	Q (35) : 18 (51.4%)
---------------------	-----------------------	---------------------	---------------------

X校、Y校では9割の生徒がこの回答であるが、P校、Q校では半分強といったところである。では、他の生徒、とくにP校とQ校の他の生徒たちはどのような表現をしているのだろうか。(i-1)の次に多かったのが、(i-2)と(i-3)である。これらはどちらも学校で教えらるる構造ではなく、また、筆者の知る限り、4校すべての所在地およびその周辺のどの地域変種においても、少なくとも伝統的な表現ではないと言える：

(i-2) *Euri-a egi-te-n ari da
 rain-ABS.SG do-GER-LOC AUX.ABS: 3SG

(i-3) *Eurria egiten ari du
 AUX.ERG:3SG+ABS: 3SG

(i-2)は、いわゆる「進行形」を表すもっとも一般的な構造である〈絶対格 NP — 動名詞位置格形^v — ari — ABS のみに呼応する助動詞〉に法ったものであると言える^{vi}。ariは「従事中である」ことを表す動詞^{vii}で、この動詞に対する動作主は、絶対格で表される(動名詞位置格で現れる動詞が対象を想定する事態を表すものである場合は、対象が絶対格で現れるが、これは ari でなく動名詞に支配されるものである)。(i-3)では(i-2)の助動詞 da が du となっている。あるいは(i-1)に egiten が付加されたものとも見こともできる。どちらにしても、天候の表現では du がよく使われるということが意識されているように見える。それぞれの使用状況は以下のとおり：

(i-2) *Eurria egiten ari da.

X (145) : 0	Y (123) : 4 (3.3%)	P (242) : 28 (11.6%)	Q (35) : 6 (17.1%)
-------------	--------------------	----------------------	--------------------

Y校の4人はいずれも日常生活で他言語優勢.

P校の28人のうち、日常生活で他言語のみが11人、ほぼ他言語が9人、他言語優勢が4人、バスク語やや優勢が2人、バスク語と他言語半々が2人.

Q校の6人のうち、日常生活で常に他言語が1人、常にバスク語が1人、他言語優勢が4人.

(i-3) **Euria egiten ari du*

X (145) : 2 (1.4%)	Y (123) : 1 (0.8%)	P (242) : 26 (10.7%)	Q (35) : 6 (17.1%)
--------------------	--------------------	----------------------	--------------------

X校の2人のうち、1人が日常生活で他言語優勢, 1人がバスク語優勢.

Y校の1人は、日常生活で常にバスク語.

P校の26人のうち、日常生活で他言語のみが8人、バスク語のみが1人(父母ともにバスク語母語話者) ほぼ他言語が7人、他言語優勢が7人(1人は父母ともにバスク語母語話者), バスク語やや優勢が1人(父母ともにバスク語母語話者), バスク語優勢が1人(父母ともにバスク語母語話者), バスク語と他言語半々が1人.

Q校の6人のうち、日常生活で常に他言語が2人、バスク語優勢が2人、他言語優勢が2人.

次に多かったのが (i-4) である :

(i-4) *Euri-a egi-ten du*
do-IMPERF AUX.ERG:3SG+ABS:3SG

X (145) : 2 (1.4%)	Y (123) : 2 (1.6%)	P (242) : 15 (6.2%)	Q (35) : 2 (5.7%)
--------------------	--------------------	---------------------	-------------------

これは、「動詞の不完了分詞+助動詞」という構造によるものだが、これは、多くは「現在進行中の事態」ではなく「普段、習慣的・反復的に実現する事態」を表すものである :

(A) *Iñaki-k egunkari-a irakur-tzen du*
I-ERG newspaper-ABS.SG read-IMPERF AUX.ERG:3SG+ABS:3SG
「イニャキは(ふだん)新聞を読んでいる」

しかし、次のような例もある :

(B) *Hemendik itsaso-a ondo ikus-ten da*
from here sea-ABS.SG well see-IMPERF AUX.ABS:3SG
「ここから海がよく見える」

(B) が表しているのは習慣的な事態でもあり、現在実現中の事態でもあることから、このような例からの類推で、今現在雨が降っていることも (i-4) のように表してしまうのかもしれない.

X校の2人のうち、1人は日常生活で常にバスク語(父母ともにバスク語母語話者), 1人はバスク語優勢.

Y校の2人のうち、1人は日常生活で常にバスク語(父母ともにバスク語母語話者), 1人は他言語優勢.

P校の15人のうち、日常生活で常に他言語は0, ほぼ他言語が3人, 他言語優勢が4人, バスク語優勢が6人(うち2人は父母ともにバスク語母語話者), 常にバスク語が1人(父母ともにバスク語母語話者), バスク語と他言語半々が1人.

Q校の2人のうち, 1人は日常生活はほぼバスク語, 1人は他言語優勢.

ほかに, 明らかに地域差でもなく, スタンダードでもない「誤用」と言っている例がいくつか見られた. そのうちのいくつかを掲げる:

・**Euria egiten dago*: 進行・継続相を表すのにスペイン語の *estar* 「いる, ある」と結び付けがちな *dago* 「3人称単数がある, ある」を使っている. P校に5人見られた. 5人のうち2人が日常生活で他言語のみ, 1人がほぼ他言語, 2人がバスク語優勢で, このうち1人は父母ともにバスク語母語話者.

・**Euritan ari du*: *euritan* は *huri* 「雨」の位置格不定数形. P校に5人. 5人のうち日常生活で他言語のみが1人, 他言語優勢が2人, バスク語やや優勢が1人.

・**Euritan ari da*: P校に2人. 1人は日常生活でほぼ他言語, 1人は他言語優勢.

・**Euria dabil*: *dabil* は「3人称単数が活動している・歩いている」. P校に3人. 日常生活で他言語のみが1人, ほぼ他言語が1人, 他言語優勢が1人.

・**Euritan datza*: *datza* は「3人称単数が横たわっている」の意. P校に1人. 日常生活はほぼ他言語.

また, 誤用とは言い難いが, *Euritan dago* がP校に8人見られた. これはビスカイアのいくつかの地域で聞かれる地域変種である. このように答えた生徒たちがビスカイア方言の影響を受けているのか, あるいはそのような影響と無関係にこのように答えたのかは定かではない. 8人のうち日常生活で他言語のみが2人, ほぼ他言語が2人, 他言語優勢が2人, バスク語優勢が1人, バスク語と他言語半々が1人, となっている.

V. (j) *Carmen es una chica de muchas exigencias.* 「カルメンは要求の多い女子だ」

この項目の目的は, 「多い」に当たる語に *asko* の位置属格形を使う場合, *askoko* とするか, *askotako* とするかを見るためである. 形態上 *askoko* は単数形, *askotako* は不定数形とみなされるが, 意味上は複数を表すものであること, 形態上, 不定数形と複数形が似ていることから *askotako* がスペイン語 *muchas / muchos* に相当するものとみなされることがあると考えられる.

この文についても様々な例が集まった. 筆者が想定していたのは次 (j-1) のような文で, 多くの生徒がこれと同工異曲の文を回答している. *neska* 「女子」の代わりに *neskatil* 「少女」, *emakume* 「女性」, *persona* 「人」も可, また絶対格単数形の代わりに *bat* 「1」を付したのも可, *eskaera* 「要求」の代わりに *eskakizun / exigentzia* も可. 語順は文法的である限り問わない:

(j-1) *Carmen eskaera asko-ko neska da*
C.ABS requirement much-LG.SG girl.ABS.SG s/he is

X (141) : 37 (26.2%)	Y (129) : 45 (34.9%)	P (233) : 60 (25.8%)	Q (34) : 7 (20.6%)
----------------------	----------------------	----------------------	--------------------

(j-2) のように *asko* の代わりに *handi* 「大きい」を用いたものが多数見られた。これについては、数人のバスク語母語話者 (40 代~50 代) から「*eskaera* (要求) に *asko* (多くの) を付した場合と *handi* (大きい) を付した場合では意味が異なるが、誤用とは思わない」とのコメントを私信として得ている：

(j-2) *Carmen eskaera handi-ko neska da*
big-LG.SG

X (141) : 57 (40.4%)	Y (129) : 27 (20.9%)	P (233) : 79 (33.9%)	Q (34) : 11 (32.4%)
----------------------	----------------------	----------------------	---------------------

また、次のように形容詞を用いたものも相当数あった：

(j-3) *Carmen neska* {*exigente-a* /*zorrotz-a* /*zail-a*} *da*
{*demanding-ABS.SG* /*severe-ABS.SG* /*difficult-ABS.SG*}

X (141) : 34 (24.1%)	Y (129) : 19 (14.7%)	P (233) : 39 (16.7%)	Q (34) : 4 (11.8%)
----------------------	----------------------	----------------------	--------------------

askotako を用いた誤用は少数である：

X (141) : 1 (0.7%)	Y (129) : 0	P (233) : 10 (4.3%)	Q (34) : 2 (5.9%)
--------------------	-------------	---------------------	-------------------

X 校の 1 人は、日常生活では他言語優勢、Q 校の 2 人はともに日常生活で他言語優勢、うち 1 人は父母ともに母語話者である。P 校の 10 人のうち、日常生活で常に他言語が 2 人、他言語優勢が 4 人、バスク語優勢が 4 人。

なお、この項目でも次のような能格がらみの誤用が P 校に 3 例見られた (j-4 ~ j-6)。 (j-4) と (j-5) では動作主を表す名詞 (*Carmen*) に不要な能格のマーカが付されている。(j-5) に関しては、連体修飾節中の「能格+絶対格」に呼応する助動詞 *du* に引かれた可能性がある (用例は当該の生徒が書いた文をそのまま掲げる。形態素境界は筆者による)：

(j-4) **Exigentzia asko-ko neska da Carmen-ek*
requirement much-GL.SG girl.ABS.SG s/he is C-ERG

(j-5) **Carmen-ek [exiji-tzen du-en neska] da*
C-ERG [demand-IMPERF AUX.ERG:3SG+ABS:3SG-REL girl.ABS.SG s/he is
「カルメンは要求をする女子だ」

(j-4) は 2 人の生徒が、(j-5) は 1 人が回答。1 人は日常生活で常にバスク語、他の 2 人は他言語優勢。

(j-6) では能格のマーカが落ちている。これを回答した生徒 1 人は日常生活で常に他言語。

(j-6) **Karmen^{xviii} exigentzia handi-a du*
K.ABS big-ABS.SG have.ERG:3SG+ABS:3SG

「カルメンはたくさん要求がある (lit: カルメンは大きな要求を持っている)」

これらを含めても、この項目での明らかな誤用は全体の3.3%と、僅かであると言える。

V. (k) *Aquella chica y aquel chico son nuestros hijos.* 「あの女子とあの男子は私たちの娘と息子だ」

この項目の目的は、「私たちの娘と息子」をどのように言うかを見ることである。バスク語では *seme-alaba-k* (*seme*: 息子, *alaba*: 娘, *-k*: 絶対格複数語尾) がもっとも普通に使われる語である。子供を表す *ume*, *haur* の複数形 *umeak*, *haurrak* も可。一方、スペイン語では「息子」は *hijo*, 「娘」は *hija* だが、「娘と息子」は *hijos* と男性形にまとめられる。これに倣い、バスク語でも「娘と息子」を *seme* 「息子」の複数形 *semeak* で表す話者が、筆者の観察ではバスク語新話者だけでなく母語話者のなかにも散見される。このような用法が高校生の間にどの程度広まっているかを調べるのが具体的な目的である。なお、X校ではこの項目の調査は行っていない。

(k-1)と(k-2)がもっとも一般的で規範的な表現である：

(k-1) *Neska hura eta mutill hura gure seme-alaba-k dira*
girl that.ABS and boy that.ABS our son-daughter-ABS.PL they are

Y (128) : 78 (60.9%)	P (237) : 155 (65.4%)	Q (35) : 24 (68.6%)
----------------------	-----------------------	---------------------

(k-2) *Neska hura eta mutill hura gure {ume-ak /haurrak} dira*
{child-ABS.PL /child-ABS.PL} they are

Y (128) : 23 (18%) (<i>haurrak</i> : 0)	P (237) : 20 (8.4%) (<i>umeak</i> : 15, <i>haurrak</i> : 5)	Q (35) : 2 (5.7%) (<i>haurrak</i> : 0)
---	---	--

ume と *haur* の違いはおもに地域差であるが、標準バスク語を習得している人はどちらの語も知っているものである。Y校とQ校の生徒のほとんどが学校の所在地に在住しているが、これらの地域では *haur* は用いられず、それがここにも反映されたと言える。一方、P校の場合は、生徒の居住地がバラエティに富んでいることから、*haur* を使用する生徒がいるのは不思議ではない。

次は「娘と息子」を *seme* 「息子」の複数形 *semeak* で代表させるものである：

(k-3) **Neska hura eta mutill hura gure seme-ak dira*
son-ABS.PL they are

Y (128) : 27 (21.1%)	P (237) : 58 (24.5%)	Q (35) : 9 (25.7%)
----------------------	----------------------	--------------------

このように、3校すべてで同じくらいの数値になっている。Y校の27人のなかには、日常生活で常にバスク語を使用している生徒が20人(うち両親共バスク語母語話者である生徒17人, 両親が母語話者と新話者である生徒3人)を占める。このことは、「娘と息子」を「息子」を表す語でまとめるのは、元々はスペイン語の写しであったとして

も、母語話者のなかにも相当広まっている可能性を示唆する。

なお、*seme*「息子」でなく *alaba*「娘」で代表させた例が P 校に一つ見られた。この生徒は、日常生活では他言語優勢で、両親とも非バスク語母語話者。

また、*seme-alabak* と複数形にするべきところを単数形 *seme-alaba* とする誤用が P 校に 3 例見られた。3 人中 1 人は父母ともにバスク語母語話者で日常生活はバスク語と他言語半々、1 人は父母がバスク語母語話者と新話者で日常生活はバスク語、1 人は同じく日常生活ではバスク語やや優勢、と回答している。

ほかに、絶対格で *neska hura eta mutil hura* と表示されるべき「あの女子とあの男子」を次のように能格で表示している例が P 校に 2 例見られた：

(k-4) **Neska horrek eta mutil horrek gure seme-alabak dira*
that.ERG

(k-5) **Neska horrek eta mutil horrek nire aurrak dira*
my

この 2 人のうち、1 人は父母が非バスク語話者と新話者で日常生活は常に他言語、1 人は父母ともに新話者で日常生活はスペイン語優勢、と回答している。

また、「あの女子とあの男子」の部分は、*neska hura eta mutil hura* とするほか、*neska eta mutil haiek* (*haiek* : あれらの)「あれらの女子と男子」とする表現も有り得るが、**neska eta mutil hura*, **neska eta mutil hori* (*hori* : その) とする「数の不一致」の誤用が P 校に 16 例 (6.8%) 見られた。16 人中 3 人が日常生活では常に他言語、8 人が他言語優勢、2 人がバスク語と他言語半々、2 人がややバスク語優勢、1 人がバスク語がかなり優勢 (この生徒のみ父母ともにバスク語母語話者) と回答している。

5.2 文法的誤用に関する考察

明確に「誤用」と言える例が見られた項目について考察とまとめを記す：

①名詞節中の助動詞に付すべき語尾の混同：(d)「イニャキはアネは今日来ないだろうと言っている」と (g)「君はだれが来ると思う？」と (h)「私はアネが来るかどうかわからない」で、名詞節中の助動詞に付す語尾 *-(e)la* と *-(e)n* と *-(e)nik* の混同、何の語尾も付さないという誤用が見られるわけだが、*-(e)nik* は主節が否定文で間接疑問ではない場合に使われるため、(h) のように *Ez dakit* 「私はわからない」に接続する場合に混同が起こり易いと考え得る。しかし、(g) のように主節が否定文でなくても同じ誤用が起こるので、結局は、語尾の使い分けが曖昧になっている (身についていない) ためと考えられる。また、同じ名詞節でも (d) の「～と言っている」の場合は、名詞節内の助動詞の語尾については正解率 100%であったが、この語尾は動詞 *esan*「言う」や *uste*「思う」と共起することが非常に多く、それだけ耳にする機会も自ら使う機会も多いため、個別に、自然と結び着くのかも知れない。

②能格がらみの誤用：これが見られたのは (d), (e)「イニャキは学校へ行かなければな

らない), (f) 「一方, 君は家にいなければならない」, (g), (h), (j) 「カルメンは要求の多い女子だ」, (k) 「あの女子とあの男子は私たちの娘と息子だ」の7つである。(d), (g), (h), (j), (k) における誤答率はそれぞれ, 7.2%, 3.8%, 2%, 1.2%, 0.5%であるのに対し, (e) と (f) は各々23.6%, 18.2%と顕著に高率になっている。これは, 両方とも, 規範としては動作主を能格で表しそれに呼応する助動詞を求める *behar* 「～ねばならない」と, 動作主が絶対格で表されそれに呼応する助動詞を求める動詞 (*joan* 「行く」, *geratu / gelditu* 「残る」, *egon* 「いる」) が共起するものであることから, 混乱が生じやすいものと思われる。また, 「君はだれが来ると思う」の *nor* 「だれ」に能格のマーカを付してしまう誤用は, *nor* の直後に *uste duzu* 「君は思うか」が続く語順と, *etorriko dela / datorrela* 「来ると」が続く語順があるわけだが, *nor* を能格にした例19例のうち, 前者の語順が14例, 後者の例が5例である。後者の語順の場合, *nor* 「だれ」に対する動詞述語が直後に続き, しかも動詞が *etorri* 「来る」という, 明らかに動作主が絶対格で表されるものであるため, 誤用が生じにくいのではないかと考え得る。しかし, 同じく *etorri* 「来る」を動詞述語とする (d) 「イニャキはアネは今日来ないだろうと言っている」, (h) 「私はアネが何時に来るかわからない」においても, 動作主 *Ane* を *Anek* とした誤用が (d) で9例, (h) で10例見られることから, 明確なことは言えないようだが, そもそもコンピュータ文である (j) や (k) における誤用を併せて考えると, 要は, 能格と絶対格の使い分けがうろ覚えであることに起因すると言えるのではないかと。なお, この6項目の総回答数に対する能格がらみの誤用率は8.5%である。この数値を高いと見るかどうかについては, 現時点では明言できない。

③ [i]父母の母語と父母のバスク語能力に関わらず, 父母と意思疎通に使う言語が常に他言語, または他言語が優勢である生徒で, [ii](a) から (k) の項目すべてにおいて規範的, あるいは規範的でなくとも多くのバスク語母語話者が容認する回答をした人の人数と割合は次の通りである:

表 XVIII

	X校	Y校	P校	Q校
[i] の数値	144人中26人 (18.1%)	130人中17人 (13.1%)	241人中141人 (58.5%)	35人中24人 (68.6%)
[ii] の数値	26人中20人 (76.9%)	17人中12人 (70.6%)	141人中21人 (14.9%)	24人中6人 (25%)

[ii] の数値を見ると, X校とY校では, [i] の生徒の7割以上が「規範的, あるいは規範的でなくとも多くのバスク語母語話者が容認する回答」をしている。一方, P校とQ校では, X校とY校に比べその数値が非常に低くなっている。

「学校所在地や居住地(生徒がおもな活動の場所としているところ)でバスク語が日常的に使われているか否か」は, バスク語の習得にとって家庭の言語以上に重要な意味を持つものと考え得る。

6. まとめと今後の課題

今回、筆者が知りたかったことは、幼少時からバスク語で教育を受けてきている高校生のバスク語使用状況と、バスク語能力（基礎的な部分）の相関であったが、質問項目が少ないこともあり、今後の新たな調査に待たれる部分は多いと思われる。

(1) 使用状況に関しては、もっとも目を引いたのは次の点である：

父母ともにバスク語母語話者である場合、「ふだんバスク語で話す」とした生徒が、X校とY校の93.3%、100%に対し、P校では68.4%、Q校では60%にとどまること(表XII)、学校で友人とふだんバスク語で話す、とした生徒がX校では93.8%、Y校では98.5%であるが、P校では13.3%、Q校では28.6%にとどまり、スペイン語で話すとした生徒がX校とY校では0だが、P校では32.4%、Q校では20%いることである(表XVI)。この違いはどこから来るのか。それは既述のとおり、学校所在地や居住地でどれだけバスク語が生きているか、ということと大きく関わっていると考えられる。すなわち、家庭や学校などの限られた空間に対して、より大きな生活領域である街(社会全体)のバスク語率の高低が大きな要因となっていると考えられる。家庭や学校でバスク語を使用しているも、一歩外に出ると他の言語が支配的であるならば、高校生くらいの年齢の人間がそちらの方へ傾くのは自然なことであろう。また、そのような環境では、「学校教育がバスク語だし、うちの子はスペイン語が上手にならないのではないか」と心配して意識的に家庭でスペイン語を使おうとする親も出てくる。また、都会は概してバスク語率が低く、農村や漁村部ではバスク語率が高いが、「都会＝スタイリッシュ、モダン」といったイメージから、この年代の若者にありがちな「スペイン語のほうがかっこいい」という思いを持つ生徒もいるだろう。バスク語が生きている、ということは、生活のあらゆる「シーン」でバスク語が使用される、ということであると考えるが、バスク語率が低いコミュニティで、学校教育の力のみで生きたバスク語を保っていくのは、なかなかの難問であると感じる。

(2) 文法・語法の側面に関しては5.2で述べたが、ここでは次の2点を挙げておきたい：

(i) いわゆる「規範」から外れた誤用については(高校生たちは学校では共通バスク語というスタンダードを学んできている)、格と動詞・助動詞の呼応の不備、名詞節を作るための語尾の誤用、などが目立って散見されたが、いずれも少数であるとは言える。そして、このような誤用が、「いわゆる国語があまり得意でない人にありがちな間違い」であるのか、「母語話者としてあり得ない間違い」であるのかの判断は筆者には困難であるため、上の世代(40代～50代)のバスク語母語話者(バスク語で教育を受けた人もスペイン語で教育を受けた人もいる)数人にコメントを求めたところ、格と助動詞の呼応の誤用については「許容できない」とする人が大多数であった(すべて私信による)。そしてこのような誤用は、「日常生活で常に他言語または他言語優勢」という生徒に多く見られることがわかった。学校内で、もっと言えば教室内で「強制的に」(そう感じている生徒も少なからずいるであろう)バスク語を使用する環境を作っても、そのほかの場所での言語環境の影響は途方もなく大きいのではと思わざるを得ない。このことを示すのが表XVIIIの結果で、生徒の活動の中心となるコミュニティ全体でバスク語が生きていけば、

家庭での言語がバスク語でなくとも、規範的なバスク語が身につく可能性が高いということが言える。

(ii) いわゆる「スペイン語の写し」と思われる表現のうち、(c)の「先日」に関しては、そのような表現はX校とY校では0であるが、(k)の「娘と息子」に関しては「息子」を表す語で代表させている回答がY校・P校・Q校ともに同じくらいの率であった（およそ21%~26%）。このように、父母がバスク語母語話者であり、生まれた瞬間から（すなわち就学前から）バスク語で育ってきた生徒が大多数を占めるY校においてもこのような結果が得られたことは、精査に値すると考える。また、「暗くなってきた」のような、格と助動詞の呼応に関して例外的であるような表現については、X校とY校においても、これまで広く使われてきた例外的な構造からより規則的な構造の方向へシフトしているともとれるような結果が得られたが、これなども精査に値すると考える。すなわち、地域として全体的にそのような用法が広まって来ているのか、世代間で違いがあるのか、という、地域差と世代差をクロスさせた調査である。そのような調査から、現代バスク語の変貌の一端が見えてくると考える。

【参考文献】

2012. 萩尾生・吉田浩美 編著

『現代バスクを知るための50章』（東京：明石書店）

2016. Goikoxea, G.

[/https://www.berria.eus/paperekoa/1841/010/001/2016-04-05/euskaldun_berriaren_etiketak.h](https://www.berria.eus/paperekoa/1841/010/001/2016-04-05/euskaldun_berriaren_etiketak.h)

ⁱ 本研究で用いるデータは、2018年9月および2019年2月に行ったフィールドワークによって得られたものである。これらの調査は以下の科研費により実現した。2018年9月：平成28~30年度科学研究費（基盤研究（C））「現代スペインの諸言語の音声・音韻的現象に関する対比的研究」（課題番号16K02635，研究代表者：福脇教隆，平成26~30年度科学研究費補助金（基盤研究（C））「バスク語諸方言の文法記述（「親世代」と「子世代」のこぼのの違いをめぐって）」（課題番号：26370491，代表者：吉田浩美）；2019年2月：平成28~30年度科学研究費「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語—言語接触と言語形成の類型を探る—」（基盤研究（B））（課題番号16H03417，代表者：藤代節）。

ⁱⁱ その後、1979年のゲルニカ憲章により、スペイン語と並んで、バスク自治州における州公用語となった。（萩尾・吉田2012, p.190.）

ⁱⁱⁱ http://eu.eustat.eus/bankupx/pxweb/eu/euskara/-/PX_3671_ne02.px#axzz5vbwFDdRu

^{iv} ここで言うスペイン語とは、カスティリア語を指す。以下同様。

^v スペイン領バスク自治州の教育制度は、スペインの LOMCE (Ley orgánica para la mejora de la calidad educativa) という法律に基づいている。

^{vi} Eustat による：http://eu.eustat.eus/municipal/datos_estadisticos/info_territorial_e.asp

^{vii} 成人後あるいは成人に近くなってからバスク語を習得した人だけでなく、家庭の言語がバスク語ではない人で、幼少時からイカシトラで教育を受けてきてバスク語話者になった人も「バスク語新話者」とする考え方もある（Goikoxea, 2016）。

^{viii} 「助動詞」と「動詞の単純形」は格と呼応して活用する。助動詞は、動詞の分詞形または動詞語幹とともに共起して複合形を成す。複合形においては、動詞は辞書的意味と完了・不完了などの相を現す。助動詞は、文中にある能格 and/or 絶対格 and/or 与格のNPの人称と数に呼応して活用する。また、時制と法をも表す。

限られた少数の動詞は、助動詞なしでそれ自身が活用する形を持つ（単純形）。単純形では、複合形で動詞と助動詞が分担していた役割を動詞だけですべて担う。本稿では、助動詞がおもに扱われるので、以下、「助動詞または動詞の単純形」と記すべきところを、煩雑さを避けるために単に「助動詞」と記すこととする。

^{xv} 用例は、実際のアンケートの回答では共通バスク語での回答もあれば、各自の方言での回答も見られたが、ここでは共通バスク語の形を代表として正書法で掲げる。正書法の文字と音価の対応は以下のとおり。注意すべき音価のみ音声記号を掲げる。母音=i, e, a, o, u。子音=b, d, g; p, t, k; m, n [n] (iのあとでしばしば [ɲ]), ñ [ɲ]; l [l] (iの後でしばしば [ʎ]), ll [ʎ~j], r (語頭, 語末, 後中の子音の前後で [r], 母音間で [r]), rr [r]; f; j [x~ç~j]; z [舌端による無声歯茎摩擦音], s [舌尖による無声歯茎摩擦音], x [ʃ]; tz [舌端による無声歯茎摩擦音], ts [舌尖による無声歯茎摩擦音], tx [tʃ]; h [h] (南側の多くの地域変種では黙字)。用例のグロスは簡略化している部分もある。形態素境界はハイフンで示すが、省略している場合もある。略号は以下のとおり: ABL=奪格, ABS=絶対格, ALL=方格, AUX=助動詞, COMP=complementizer, ERG=能格, FUT=未来分詞, GER=動名詞, GL=位置属格, INDEF=不定数, IMPERF=不完了分詞, LOC=位置格, NEG=否定辞, PERF=完了分詞, PL=複数, POT=可能法, REL=連体修飾語尾, SG=単数。

^x 「バスク語学習者」とは「成人あるいは成人に近くなってから『外国語』としてバスク語を学習している人」を指す。幼少時からバスク語で教育を受けてきた人と区別するために本稿ではこのように定義する。

^{xi} 「他言語」は、事実上スペイン語が大多数ではあるが、家庭での言語がスペイン語以外の外国語であるケースもあるので、他言語と記すこととする。なお、とくにスペイン語と明記する必要がある場合はこの限りではない。また、学校と街における他言語はこの場合スペイン語に限られるので、スペイン語と記すこととする。

^{xii} {A/B} は、「A か B のどちらかを選択する」を表す。

^{xiii} 次のような非人称の構造。動作主はいかなる形でも現れず、助動詞は絶対格 3 人称単数に呼応するものが現れる:

non-dik joa-ten da geltoki-ra
where-ABL go-IMPERF AUX.ABS:3SG station-ALL.SG

「駅へはどの道を (lit: どこから) 行くんですか?」

^{xiv} behar 「～ねばならない」は、(e-1) における場合と (e-2) における場合とでは異なる機能を持っていると言えるが、この問題には今回は立ち入らない。

^{xv} ここで動名詞位置格形と呼ぶものは、不完了分詞と同形である。これを動名詞位置格形とみなすか、動詞の不完了分詞とみなすかは議論の余地があるが、今回はこの問題には立ち入らない。

^{xvi} 用例は以下のとおり:

Iñaki [egunkari-a irakur-tze-n] ari da.
I.ABS [newspaper-ABS.SG read-GER-LOC] be doing AUX.ABS:3SG

「イニャキは新聞を読んでいる最中だ」

^{xvii} *ari* は、「形態上は完了分詞のように見えるが、意味の上では継続相を表す一連の動詞」の一つ。ほかに *bizi* 「住む, 暮らす, 生きる」, *espero* 「期待する, 予想する」, *falta* 「欠く」, *nahi* 「欲する」, *behar* 「必要とする」などがある。これを動詞の完了分詞とみなすか、などについては議論の余地があるところだが、今回はその問題には立ち入らない。

^{xviii} 「カルメン」のスペリングは、スペイン語風に *Carmen* と書いている生徒もいれば、バスク語風に *Karmen* としている生徒もいる。グロスは各自のスペリングに従って付した。

Nola eta norekin egiten dute euskaraz Gipuzkoako lau udalerriko gazteek?

YOSHIDA Hiromi

Lan honetan analizatu ditugu Donostiako, Legazpiko, Azkoitiko eta Azpeitiko institutu banatan batxilergoko gazteei eginiko inkesten emaitzak. Inkestak, oinarritzko informazioak (bizitokia, gurasoen ama-hizkuntza zein den, gurasoek ba al dakiten euskaraz etab.), euskararen erabilerari buruzko galderak (gurasoekin eta anai-arrebekin zein hizkuntzaz hitz egiten duten, lagunekin kalean / eskolan zein hizkuntzaz egiten duten, eta zeinekin egiten duten gehien euskaraz) eta galdera gramatikalek (oinarritzko esaldi batzuk nola esaten dituzten euskaraz) osaten dituzte. Azkoitiko eta Azpeitiko gazteek ia beti, ia denekin egiten dute euskaraz, eta akats gramatikal gutxi. Baina, zenbait gauza estandarretik kanpo egiten dituzte.

